平成 28 年度　総合的な教師力向上のための調査研究事業

実施テーマ　新たな教育課題に対応するための科目を教職課程に
位置づけるための調査研究

学校インターンシップ（試行）の実施とその効果

2017（平成 29）年 3 月

福島大学人間発達文化学類
事業実施責任者　　松下行則
事業実施事務局長　齋藤幸男

はじめに

１　学校インターンシップの必要性

教員の実践的指導力の要素は、「教科等に関する指導力」、「総合的な問題解決能力」、「生徒指導力」、「学級を経営する力」、「児童生徒の理解力」、「保護者や地域社会と 連携する力」、「情報活用などに関する力」、「幅広い教養と豊かな人間性」、「児童生徒に対する教育的愛情」、「教育者としての使命感」、「社会人としての良識」、「研修への意欲など自己教育力」、「服務規律の遵守」、「心身の健康」など多岐にわたると言われる。しかし、私たちは、その中で、発達過程にある児童生徒を対象とする教員の実践的指導力の中核は、「児童生徒の理解力」（以下、「子ども理解」と略）を基礎とする「学級を経営する力」「教科等に関する指導力」だと考えてきた。「児童生徒の理解力」が基礎にない教科力、学級経営力は、児童生徒の主体性を軽視する教師中心の考え方に陥る可能性が大である。

教員養成においての、この「児童生徒の理解力」の養成は全く不十分である。本学類は、大学入学後からの各種のボランティアや２年生の学校参観、そしてとりわけ 3、4 年生の 4 週間の教育実習、そして「学校教育支援実習Ⅰ、Ⅱ」（学校ボランティアの単位化）を実施してきた。しかし「児童生徒の理解力」として個別指導的な、あるいは特別支援的な理解がこの一連の取り組みで可能になっているが、「学級を経営する力」とは結びついていない。教員養成段階で「学級を経営する」経験（例えば「仮担任」）によって、「児童生徒の理解力」が向上し、新任教員としての自覚と責任の下で、スムーズに学校現場に立つことが可能になるのではないだろうかと考えてきた。その方向で、つまり教員養成カリキュラムに「学校インターンシップ」が位置づけられる必要があると思われる。

２　本学類のこれまでの取り組み

①本学類では、平成 24 年度から学校ボランティア支援室を設置し、学校ボランティア学生のボランティア経験をもとに「学生の実践力向上の３フェーズ」（観 察、参加、参画）として概念化してきた。フェーズ１は、学校の概要を知り、ボランティア活動の具体的な課題と展望をもつことができる段階（参観から参加へ）。フェーズ２は、課題をもって、計画的に支援する段階（積極的な活動参加へ）。フェーズ３は、学生の特性を学校教育活動に役立て、学校文化を高める段階（参加から参画へ）である。それぞれのフェーズは、大まかに言うと、2 年次～4 年次の学年に対応している。また、平成 27 年度に 2 年次生から学校ボランティアを「学校教育支援実習Ⅰ、Ⅱ」として単位化し、教員養成カリキュラムのなかに位置付けた。

②平成 26 年度には、「実践力養成のための実践力評価基準（案）」を作成し、ボランティア学生に適用して、仮評価を実施した。平成 27 年度は、文科省「総合的な教師力向上のための調査研究事業」を実施し、「平成 27 年度　実践力評価基準」を作成するとともに、「カンファレンス活動の実施」等を通じて、教員としての「児童生徒の理解力」育成を図ってきた。

③さらに平成 27 年度からは、学校 ボランティアを数ヶ月以上継続的に経験した「新任教員１名への１年間の観察、カンファレンス活動」を通じて、教員養成段階から新任教員段階には「児童生徒の理解力」に大きな落差があることがわかってきた。その背景として教員の資質能力としての「教育者としての使命感」、とりわけ「責任感」が養成段階では形成されにくいという問題がある。一つの要因としては、学級での責任ある対応がボランティア等では可能ではないことがある。さらに、同年度に、伊達市教育委員会の協力を得て伊達市立保原小学校において実施した２名の１週間「教職インターンシップ」（平成 28 年 3 月 7 日～11 日）によって、「学級経営や授業実施の手順」が未形成という問題が浮上してきた。

④本学類は、平成 26 年度までに 4 市町教育委員会（福島市、郡山市、伊達市、国見町）と連携・協働協定を締結し、学校ボランティア、学習支援等を実施してきた。平成 27 年度には 2 町村（大玉村、棚倉町）と、平成 28 年度には桑折町と連携・協働協定を締結した。学校ボランティアは、福島大学が位置する県北地区だけでなく、他地区に広がり始めている。

３　本事業及び学校インターンシップの課題

①「教職課程検討委員会」を組織し、そのメンバーとなってもらい、学校インターンシップの実施体制及び実施内容・方法について検討する。

②学級を経営する経験を積むための「学校インターンシップ」を実施し、それについて意見をまとめ、教員養成カリキュラムとして実施するための仕組みと課題を検討する。

③教員採用候補者になった 4 年生がインターンシップを実施し、学校等にアンケートを取り、その効果を検証する。

④学び続ける教員の「養成と採用と研修の一体化」の課題、つまり大学と教育現場の「接続」「連携・協働」（大学4年生～新任3年目くらい）の課題を明らかする。

⑤平成 27 年度に実施した「新任（1 名）の１年間の観察、カンファレンス活動」を継続し、2 年目の課題を明らかにする。

⑥同年度に「教職インターンシップ」を試行した新任教員の観察とカンファレンスを通じて、実践力に与えるインターンシップの効果を検証する。

⑦以上の取り組みは、大学 4 年生、新任教員、新任 2 年目のサポートを実施することを通じて、採用・研修の連続性を意識した「初任時代」の教師力向上の課題を明らかにするとなる。

４　本事業の具体的な取り組み

①教職検討委員会の開催

・研究計画に関する打ち合わせと課題の確認。第１回「教職課程検討委員会」の開催第２回「教職課程検討委員会」の開催（成果と課題）。

②新任、2 年目教員へのインタビュー

・学校への依頼とともに、新任教師、2 年目教師に対して、4 月当初の「学級経営方針」等をインタビューする。

・新任、2 年目教員（学級担任）への「児童生徒の理解」と「学級経営方針」の変容に関するインタビューの実施。 学校の初任者指導教員、管理職等へのインタビューの実施。

・新任の学級担任への 1 学期（3学期制の場合）の学級経営のまとめについてインタビューし、中間のまとめをつくり、2学期以降の指針を新任とともに確認する。

③教員採用内定をもらった 4 年生による学校インターンシップの実施。

④学校ボランティアの充実策の実施

・27 年度学校ボランティアを実施した3 年生に 4 月からのボランティアを呼びかけ、ボランティアを実施する（週 1 回)。

・学校ボランティアを実施（週 1 回）した 4 年生にカンファレンス活動を行い、データを収集する。

（松下行則）

目　次

はじめに i
1　学校インターンシップの必要性 i
2　本学類のこれまでの取り組み i
3　本事業及び学校インターンシップの課題 ii
4　本事業の具体的な取り組み ii
Ⅰ　課題の所在 1
Ⅱ　新採用教員・2年目教員への調査 2
1　調査対象・方法 2
2　新採用教員の現状の概要 2
⑴　新採用教員の4か月 2
⑵　新採用教員の夏休み以降 3
3　新採用教員の課題分析 4
4　2年目教員の現状と課題 7
⑴　子ども理解 8
⑵　授業づくり 8
⑶　学級づくり 10
⑷　学校・地域づくり 10
5　整理 12
Ⅲ　学生の資質能力の客観的評価（学校教育支援実習） 14
1　学校教育支援実習の概要 14
2　「実践力評価基準」（資料4） 15
3　学校教育支援実習の「学び」 16
⑴　2年生TY 16
⑵　3年生SH 17
⑶　整理 18
4　合同カンファレンスでの「学び」 19
⑴　SHの「学び」 20
⑵　TYの「学び」 23
⑶　整理 25
Ⅳ　学校インターンシップの構想・実施 26
1　学校インターンシップの構想 26
2　学校インターンシップ計画・実施 28
⑴　計画（資料参照） 28

⑵　実施 …… 29
3　評価 …… 33
⑴　学生 …… 33
⑵学校 …… 36
4　運営 …… 37
⑴　時期 …… 37
⑵　期間 …… 37
⑶　実習日数 …… 37
5　整理 …… 37
Ⅴ　まとめ …… 38
おわりに …… 39

Ⅰ　課題の所在

BS（氏名の略称。以下同じ）は、今年度の 4 月に教員に採用された。5 か月目の夏休み中の面談で、途方にくれたような笑い顔で「どうしていいかわからない」と言っていた。9 か月目の冬休みの面談では「学校ボランティアで入った学級の先生を真似ようとしているのだが同じようにいかないことが分かって、Y 先生はすごかったんだと思った。そのときのノートを見返しながら実践している」と、少し明るい笑顔で語ってくれた。

教員 2 年目の NA は、アンケートで 1 年目をふり返り、「昨年は、1 年目で何も分からず、ベテランの先生と同じ仕事を求められることに苦痛を感じていました」と、書いている。そのあとに、「2 年目の今年は、仕事の流れも分かり、自分のやりたいことが少しずつできるようになってきました。だからこそ、仕事量が増えた今年の方が、昨年より生き生きと働くことができているように感じています」と、続けている。

「3 月まで学生だったのが 4 月 1 日から教員になる」ことは、社会人としてどの職業でも同じだが、「ベテランと同じ仕事を任される」のは教員の特徴といえる。学生と教員とに大きなギャップがあり、「教員 1 プロブレム」が生じている。

昨年度は、「総合的な教師力向上のための調査研究事業」を受けて、学校ボランティア活動をとおして教員へ接続する方策とその効果を「福島の未来を創造する能動的な教師としての基礎的実践力評価基準（試案）」（以下、「実践力評価基準」）を手がかりに探った。

今年度は、新採用教員、2 年目教員から実践的指導力の内容を調査検討し、学生の資質能力の客観的評価と学生による合同カンファレンスを行った内容を整理し、「学校インターンシップ」[1]を今年度も行い課題と成果を整理し、学生と教員の双方から教員養成と教員 1 年目の接続のハードルを少しでも低くする方策を探ろうとした。

---

[1]　昨年度は「教職インターンシップ」の用語を用いたが、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（平成 27 年 12 月 21 日中央教育審議会答申）に従い、今年度から「学校インターンシップ」に統一した。

Ⅱ　新採用教員・2年目教員への調査

本調査は、新採用教員、2 年目教員が何に課題を持ち、どのように対応しているのかを調査し、養成段階にできることは何かを探るために行った。

1　調査対象・方法

○　新採用教員

学生のときに学校ボランティアと学校インターンシップを体験した新採用教員 AS と BS の 2 人と、学校ボランティアを行い、学校インターンシップは体験していない新採用教員 CS と MN の 2 人に聞取り調査を行った。

○　2 年目教員学生のときに学校ボランティアを行っていた教員 UR と NA の 2 人にアンケート調査を行った。内 UR は、昨年度教室訪問調査して参与観察を月 1 回年 9 回行い、今年度も 9、12、3 月の 3 回行った（表 1）。

（表 1）　調査対象教員

○　新採用教員

No.	名前	聞取り回数（調査日）	アンケート回答	備考（担任学年人数、学級数）
1	AS	2 回（8/18、12/26）	有(8 月、1 月)	小 2 年 23 人担任、学年 3 学級
2	BS	2 回（8/14、12/23）	無	小 2 年 28 人担任、学年 2 学級
3	CS	1 回（12/28）	無	小 3 年 31 人担任、学年 2 学級
4	MN	1 回（12/23）	無	小 2 年 21 人担任、学年 3 学級

○　2 年目教員

No.	名前	調査日	アンケート回答	備考
1	UR	教室訪問 3 回(9/5、12/12、3/13)	有(8 月、1 月)	小 5 年 18 人担任持上り、2 学級 昨年教室訪問調査 9 回
2	NA		有（1 月）	小 6 年担任・持上り

2　新採用教員の現状の概要

新採用教員には、4 月から 7 月までの 4 か月と夏休みを挟んで 2 学期からに変化が見られるようだ。

⑴　新採用教員の 4 か月

新採用教員は、3 月まで学生だったのが、4 月 1 日からは教員としての生活が始まる。社会人としての一歩をスタートするわけだが、環境の変化に戸惑いを持つようだ。

4 月 1 日の赴任の日に行われる最初の職員会議では、大概は学校経営方針、学校組織体制が決められるが、学校経営ビジョンや校務分掌など初めて出合う専門用語に新鮮さよりも驚きを覚えるようだ。UR は、1 年目の終わりに「はじめは分からなかった職員会議は、

今では記録を取れるようになりました」と言っているが、戸惑いからのスタートになる。

それは、教員は他の業種のように仕事の内容を時間を経ながら段階的に覚えていくのとは違って、4 月 1 日からベテランも中堅も新採用も同じ仕事内容を行うところにある。

新採用教員にとって 4 月は、社会人としての壁と教員としての壁の 2 つがある。社会人としては、仕事の中身を理解することや同僚との関係、不慣れな土地での生活に慣れることなどがある。そこに教員は、学級担任を任せられ、学級づくり、授業づくり、保護者の対応などの責任をベテランの教員と同じように任されることになる。

AS も BS も同じ 2 年生を受け持っているが、8 月の聞取りでは、「授業以外の仕事がかなりある」(AS)、「発問しても（子どもから反応が）返ってこない」（BS）などを訴えた。

AS は、学年主任のクラスの子どもたちが教師の指示通りに動いているのを見て、あせり不安になり申し訳ないと思った、と言っている。BS も、子どもの授業も保護者も思うようにいかない様子が見て取れた。AS は学年主任のクラスと比べて、BS は学生の時に学校ボランティアで見てきたクラスと比べて、頭（理想）と体（行動）がかみ合っていないような印象をもった。

⑵ 新採用教員の夏休み以降

12 月の聞取りで、2 人の表情はいくぶん明るさが見られた。昨年の UR にも見られたが、夏休みを挟んで新採用教員には変化が見られるようだ。

AS は、「学校の流れが分かってきた。行事は同学年の先生と協力してできるようになった。授業の進め方も 1 学期より余裕ができた。1 日の使い方が分かってきたので、1 日の使い方が計画的にできるようになった。子どもたちとの遊ぶ時間もとれるようになった」と、言っている。

BS も、「11 月に学芸会で表現劇をやり、（同学年の先生方から）声の大きさや出し方、めあてを持って取り組ませる指導法を学び、やり終えて自信につながった」と、言っている。

4 月から 4 か月の間に、教師は学校生活にも私生活にも一定のリズムが生まれ、同僚にも慣れ、受け持っている子どもたちも担任に慣れてきて、生活が安定してくるようだ。

また、この時期は学習発表会や運動会などの大きな学校行事があり、それに向けての取り組み方や成果に達成感を味わい、自信となり意欲につながっていることがうかがえた。

「うれしかったこと、うまくいったこと」を尋ねると、AS は「学習発表会で子どもたちがうまくできた時。保護者から子どもが先生になってよかったと言っていると聞いた時」と、BS は学芸会での成功の他に「お楽しみ会を子どもたちに任せてみたら、楽しい会になった」と話してくれた。12 月には、MR、CS の 2 人にも面談するが、MR は「お楽しみ会を子どもたちが進んで行ったこと」、CS は「インフルエンザにかかったとき、子どもたちがメッセージカードに大丈夫と心配してくれたこと」と、話してくれた。

学年合同での取り組みでも、自分一人での取り組みでも、子どもたちのやり遂げた成果

が達成感となっている。子どもや保護者が先生で良かった、先生大丈夫と心配してくれるなど、子どもや保護者に認められることも要因になっているようだ。

３　新採用教員の課題分析

それでは、新採用教員は何に戸惑っているのか、何ができて何ができなくて困っているのかを「実践力評価基準」の項目で、1 年目の取り組みと課題を見てみよう。

⑴　子ども理解

AS は、8 月の面談で、子ども理解が変わったと言っている。４、5 月は、子どもたちを変えよう、良くしようときつい言葉を言っていたが、ある時高学年の子どもから、「(受持ちの子どもたちが）先生のことをこわいと言っていた」という話を聞いて、6 月頃から違うと考えるようになったと言う。それまで、何とかまとめよう、変えないといけないと思い込み、子どもたちを信じないで頭ごなしに叱っていたとふり返り、反省し変わり、子どもたちも今では慣れてきたと言う。

AS は、「(学校ボランティアで）いろいろな子どもとかかわれたのが良かった」（12 月聞取り）と言っている。アンケートにも「まずはたくさんの子どもとかかわることが大切だと思う」と書いている。MR も「(学校ボランティアで）気になる子へ、障がいのある子への対応で、温かく見守られる」と言っていて、気になる子や障がいのある子がいることはあたりまえのことと受けとめていることが分かる。学校ボランティアでは、気にかかる子への支援が多く、自分がその子を見守るという活動になり、その子と周りの子どもたちとの関係で見守るという視点はもてなかったようだ。

その上で、AS は大学でやっておきたかったことに、「発達障がいのある児童との関わり」をあげて、「ここに悩む先生は多いと感じています。対処法や基本的なことを知っているだけで、その子や周りの子にとっても良いと思います」と書いている。

また、AS は、「学校ボランティアでは課題や問題がなかった。あれば、もっと深められたかもしれない」と書いているが、気になる子や障がいのある子をどのように指導し、学級づくりに生かしていくのかが分からくて困っている様子が見て取れる。

学生のときの「子ども理解」は、学校ボランティアや学校インターンシップをしていても、個々の子どもを理解することに関心が高く、集団としてのルールやまとまりについてまではあまり関心がなかったと言えそうだ。

「子ども理解」と「学級づくり」とが一体となった取り組み方が課題として見えてくる。

⑵　授業づくり

4 月に子どもたちが登校してくると、教師の仕事が本格的に始まる。授業であり、毎日の生活指導である。いざ始まってみると考えていたようには運ばないようだ。

「授業づくり自己診断表」で見てみよう（資料 3)。これは、神奈川県立総合教育センタ

ーが作成した『小学校初任教師のための授業づくりハンドブック』(平成 21 年 3 月) で「初任教師が授業づくりで難しいと感じていること」として上位 10 項目をあげているが、それを参考に自己診断評価表にして 4 段階評価（4:大変難しい　3:難しい　2:少し易しい　1:易しい）したものである。

AS は、9 月の段階で、4 の評価項目に「発問の仕方」の 1 項目を、3 の評価項目に「進度・学力差への対応」「児童の意見のいかし方、まとめ方」「児童が興味・関心を持てる授業にならない」「ノートの書かせ方」の 4 項目をあげている。

もう少し詳しく見てみよう。「発問の仕方」には、「発問の作り方、言葉のチョイスが難しい。これにしよう！という決め手がない」と課題を書き、具体的な方策として「十分に考える時間をとって試行錯誤していく。本などを読むことをとおして、知識をつけていく。授業の振り返りを確保する」と書いている。

「進度・学力差」には、「内容理解→課題への取り組み。かかる時間がバラバラである」と課題を書き、「早く終わった児童には、自分のレベルに分けてあるプリントを選ばせている。教え合いのようなものを行っている」と方策を書いている。「意見のいかし方」では、「児童の意見に対する価値づけが難しい」で、「受けとめてなぜそう考えたのか分かる人はいるが、意見に対して深めたり広げたりして無下に扱わないようにし、意見を言えたことを誉めたりするようにする。」と書く。「興味・関心」では、「なぜ、どうしての導入が難しい」で、「様々な視点から考えられるようにする。追試や実践を活かし考えてみる」と書く。「ノートの書かせ方」では、「書き方が児童によってバラバラ」で、「色使い、マスの使い方、書く流れを全員で共通のものにする」と書く。

聞取りでは、授業づくりのポイントとして、「子どもにどんな力をつけるかを考えて単元を組み立てる。次にゴールを見据えて逆算して組み立てる」と言い、「算数はうまくいっていると思うが、国語が一番難しい。まだ楽しいというのはできない」と、言っていた。

1 月では、4 の評価項目はなくなり、「発問の仕方」が 3 の評価になる。「色々な本などを読んでいるものの、子どもがぐっと引き込まれるような発問まで至っていない。発問に対しては、何をどうしたらよいのか分からない」と書き、「先生方に聞く。自分の授業をふり返る」と方策を書く。

3 の評価項目では、「意見のいかし方」「興味・関心」「ノートの書かせ方」はそのまま変わらないが、「板書の仕方」が 3 の評価になる。

課題として「板書は子どもの思考の可視化と言われるものの、なかなか体現できていない。何を板書すべきで、何をすべきでないのかが難しい。また、子どもにはどの部分を書かせるのか、それは指示すべきなのか、子どもに選ばせるべきなのか分からない部分である。」とあげて、「先生方に聞く。教材研究」と方策を書く。

「意見のいかし方」には、「意見を活かす前に、子どもたち一人一人が意見をきちんと考えられる時間の確保ができていない。また、意見が出た時も、子ども同士の意見のつなげ方、コーディネートの仕方が暗中模索な状態である」とし、「先生方に聞く。本を読む」と

する。「興味・関心」には、「算数などでは興味を持たせられるような工夫ができたと感じることが多いが、国語の物語文・説明文などの興味の持たせ方が難しいと感じている」とし、「先生方に聞く。教材研究、他の実践の追試」とする。「ノートの書かせ方」は、「7（板書の仕方）との関連」とし、「特になし」とする。

ASは、「学力を高める」は2の評価で、あまり難しいとは思っているわけではないようだ。発問や板書、ノートの書かせ方、意見のいかし方に注目しているのは、引き付けられる発問で子どもたちが夢中になって取り組む授業や子どもたちの発言をうまく取り上げて話し合いが展開する授業、学びの履歴が一目瞭然の板書やノートなど、理想とする授業のイメージがあって、それに近づけたいが分からないで模索している状態とも考えられそうだ。

BSは、アンケートには回答していないので詳細な検討はできないが、8月の聞取りで、授業づくりについて「発問しても返ってこない」と言っていて、12月では、「学力では2極化があり、赤刷り指導書ではうまく進まなくて、違うことをやろうとするがネタ探しが大変だ。（先生方に）聞いたりネットで探したりしている」と言っている。

MNは、12月の聞取りで、「やりたいと思わせられない。指示、発問が精選できていない。すっきりしない。実物があると食いついてきて効果がある」と言う。

CSは、やはり12月の聞取りで、授業づくりの時間が取れないと言いながら、初任者研修授業で行った理科の授業のエピソードを話していて印象的だった。

「豆電球」の授業で、理科専科の先生の指導を受けて行ったが、知識を確かめるために実験をするのではなく、実験をやってみて試行錯誤しながら分かる授業になり子どもたちも真剣に取り組んでいて実験をする意味が分かった、と充実した様子で話してくれた。

「大学でやっておいてよかったこと・やっておけばよかったこと」の問いに、4人は教材研究や授業づくり、各教科指導論をあげている。ASは、アンケートに「授業づくりは一番やってほしい。でないと、教師になったもののどうしていいか分からない。基礎がないところに経験を積んでも良いものにはならない」（8月）と書く。

CSは、理科学習指導論は模擬授業がありやりたくないくらい面倒で辛かったけど、今となってみるとやってよかった、と言っている。引き出しがたくさんほしい、ハウツーの役立つものがほしいと言うくらいに、各教科の授業づくりで戸惑っている様子が見て取れる。

本やネットに頼っていたASやBSをはじめ、4人は、同僚の先生方に聞いたり先生方の授業を参観したりしながら授業の展開を真似て覚えていくようだ。

⑶　学級づくり

ASは、学級づくりについて、8月には内容として「基本的な理解」とし、理由に「学生時代学級づくりの難しさを分かっていなかった。どんなことを求められており、何をしていけばいいのか基本的なことを学びたかった」と書く。1月には「宿題・係・当番決めな

ど最初の 1 か月を通した過ごし方」とし、「1 か月ですべきことがたくさんあったなと思います。そこが子どもたちにとっての判断基準になると思います。そこで何をすべきか実践的な学びが足りませんでした」と書く。

BS は、8 月には「気になる子が 2 人いる」という程度の報告だったが、12 月には、「落ち着けない子どもが 5 人いる。隣の子と話す、大声を出す、休み時間に毎回けんかをするなどが起きている」と言いながら、「それでも 1 学期より落ち着いてきて、学級経営が甘かった。子どもたちが見えるようになってきた」と明るく話してくれた。学校ボランティアで活動した記録を見返して、学級経営を真似ていると言う。

MN は、「1 年のときビシッとしていたので甘やかすと大変だよと言われて引き継ぎ、1 学期は叱責の回数が多かったのを、諭すようにシフトを変えた。すると、給食中、終わった人はどうするか約束事を決めても守られなくなった」と言う。CS は、自閉傾向のある K 君のかかわりで悩みをもち、「やりたいことはやるが、やりたくないっことはやらずパニックを起こす。自分勝手と自分のペースを区別させようとしている」と話す。

4 人は授業以外でも、様々な問題が起きて戸惑っている様子がうかがえる。

⑷　学校・地域づくり

学校づくりでは、同僚の先生方との関係性に関心があるようだ。4 人とも、先生方とまあまあうまくいっていると評価している。AS は、「同学年をはじめ、どの先生も優しく接してくださり、気にかけてくださっているので良好だと感じる」と言い、続けて「しかし、管理職、教務主任の対応は如何なものかと感じることが多々ある」と言っている。

MN は、「学年主任とも 3 組の先生ともうまくいっているのだが、主任と 3 組の先生がうまくかみ合わなくて、間に入って難しい」と言う。

校務分掌では、学年体育を担当して子どもの動かし方を学び、「数字が苦手です」と言いながら学籍統計の仕事をするなどして学校運営に関わっている。

地域づくりでは、保護者との関係性に関心があるようだ。大部分の保護者は理解があり、心配したり応援したりしてくれているが、一部の保護者に戸惑っている様子もうかがえる。

AS は、8 月に「熱心な方が多く、子どもの様子から考えてくれる方がほとんどです、新任ということもあり、応援してくれる人が多く、頑張ろうと思えています」と書き、12 月では「怒られたりすることはあったが、事情を話せばわかってくれたり、お願いすれば快く了承してくださる保護者の方ばかりである」と書く。

課題はあっても、大部分の保護者に温かく見守られているようだ。

４　２年目教員の現状と課題

UR、NA の 2 人は、2 年目教員である。大学では、2 人とも教員志望が高く、学校ボランティアを熱心に活動していた。

教師の仕事を、UR は「やりがいがある」とし、「子どもたちとのかかわりの中で、トラ

ブルがあってもそれは成長の中の必要なことであり、子どもたちの成長を実感できる。授業づくりの工夫など、毎日たくさん学ぶことがあるのも面白い」と書く。

NA は、「やりがいがあるが大変だ」とし、「昨年は教職 1 年目で何もわからず、ベテランの先生と同じ仕事を求められたことに苦痛を感じていましたが、2 年目の今年は仕事の流れも分かり、自分のやりたいことが少しずつできるようになってきました。だからこそ、仕事の量が増えた今年の方が、昨年より生き生きと働くことができているように感じています」と、書く。2 人とも自信に満ちていて頼もしくさえ感じる。

この自信はどこからくるのだろうか。教員生活 1 年を経験し、学校の生活リズムや子どもたち同僚、保護者・地域に慣れたこともあるが、2 人は「教師になってうれしいこと」に「子どもの成長が感じられたこと。子どもたちや保護者が自分の思いを分かってくれたこと、慕ってくれたこと。授業がうまくなったと褒められたこと」と書いていることから、自分からアクションを起こし、他の人に認められて達成感を持つことができたからだろう。

「実践力評価基準」の項目ごとに、アンケートから読み取れる中で見てみよう。

⑴　子ども理解

NA は、大学でやっておいてよかったこととして、「特別支援教育関係」をあげて、「大学での講義、発達障がい児と関わるボランティア、学校ボランティア」を通して「通常学級においても、特別な支援を必要とする児童は必ずいます。そういった児童と接する際に、障がいに関する知識や障がい児と接した経験は役立っています」と書いている。

⑵　授業づくり

ここでも「授業づくり自己診断表」をもとに見てみよう。

UR は、1 年目の資料があるので、推移をみることができる。

平成 27 年 9 月では、4 の評価項目に、「授業に参加しない児童への指導」「進度・学力差」「授業のルール」「学力を高める」をあげている。

「授業に参加しない児童への指導」は、(4→3→2) と推移していく。「具体的な課題」「具体的な方策」を見てみよう。

「関係ない話をしている児童がいる」(27 年 9 月) →「授業に関係のない話をしている児童がいる (発表を聞かない、ノートを取らない、話を聞いてもらえない)」とし、方策に「ただ話を聞いているだけでなく、ワークシートを書いたり話し合ったりという活動を取り入れるようにしている」と書く (28 年 9 月)。→「学習に集中できなかったり意欲を持てなかったりする児童は少なくなった」とし、「ノートやワークシートを書く活動などで、全員を巻き込むようにしている。作文や新聞などを作ったら、必ず子どもたち同士で読み合ってコメントし合う活動を位置づけている」と書く (29 年 1 月)。

教員 1 年目の 9 月では方策も思いつかなかったのが、ワークシートの活用や子ども同士の話し合いを取り入れながら工夫していき改善していく。同じ時期に参与観察をしている

が、27 年 9 月では授業に参加しない 3 人の子が気になっていたのが、28 年 12 月のときには 1 人になり、その子もワークシートや話し合いには取り組んでいて、全体に落ち着いた学習環境になっていた。

「進度・学力差」も、同じように個別指導の時間や T・T を取り入れ改善していく。

「発問の仕方」は、新たな課題として意識されるようになる。課題に「授業のねらいに合った発問は、教材研究が十分にできないと難しい。指導書のとおりにはならない」とし、方策は空欄になっている。29 年 1 月では、3 と評価し、方策に「発問についての本なども読んで勉強中」と書く。

評価が下がらない項目が「授業のルール」と「学力を高める」である。

「授業のルール」は（4→3→3）である。「発表に対しての同意の反応がなく、1 対 1 の受け答えになってしまう」（27 年 9 月）→「話し合いを児童だけで行うのがまだ難しい。意見の言い方・聞き方・進め方が理解できていない」とし、方策として「学活などを使って話し合いの練習を重ねる」と書く（28 年 9 月）。→「授業の 1 分前着席ができない時がまだある。」とし、「学校全体での課題でもあるので、再度ルール確認」（29 年 1 月）と書く。

「学力を高める」（4→4→3）では、「学力・意欲が低い。児童の点数が上がらない。学力テストに向けての取り組み方」（27 年 9 月）→「テストの点数を上げるためにはテストの問い方と同じように問い、答える練習をすればよいと言う先生がいたが、同じ聞き方にしか対応できない知識は意味があるのか」（28 年 9 月）と反発し→方策に「単元テストの前に復習の時間を設け、友達同士で確認し合えるようにしている。学力テストはこれから…。算数は学年全体で習熟度別の演習などを行う予定」と書く。

授業づくりに、さらに高みをめざしていることがうかがえる。

NA を見てみよう。

4 の評価項目は、「授業に参加しない児童への指導」「教材研究の時間」「学力を高める」の 3 項目である。

「授業に参加しない児童」の課題は、「集中力が持続せず、話を聞けない児童がいる」で、方策は「話を聞くときのルールを決め、こまめな指導を 4 月から継続している。話を聞かないことを叱るだけでなく、話をきかないと損をする、話を聞くとお得と児童に思わせられるような工夫を心がけている」と書く。

「教材研究の時間」では、「校務分掌が多い。単級のため同学年の先生と相談したり授業を見せてもらったりすることができない」と小規模校の悩みを書き、方策に「様々なツールの活用（デジタル教科書、NHK 動画など）、隣接校の同学年の先生と情報共有を行っている」と書く。

「学力を高める」では、「学力下位群の児童はレディネスがないため、学年をさかのぼって基礎から学習しなおす必要があり、テストの点数を取るのが難しい。文章題自体が理解できない児童がいる。」と課題を書く。

UR も、子どもたち一人一人と向き合い、どの子も分かる授業がしたいという願いが伝わってくる。

⑶　学級づくり

学級づくりについて、NA が「学級づくりにおいても、やはり学生時代の実践的な学びが役立っている」と書いてあるくらいで、アンケートからはよく分からない。

UR については、12 月訪問のインタビューで、学級づくりについて尋ねると、次のように言っている。

> 特別な学級づくりの方策はない。子どもたちとの関係は授業でつくるものだと思う。
> 今一番の悩みは、6 年生は縦割り清掃班の班長になっていて、下級生がいうことをきいてくれないと訴えてくることだ。6 年生に担任の先生にいったらと言うと、あなたたちでなんとかしなさいとか、ただ叱りつけるだけで解決にならないと返ってくる。

班長会議をして自分たちでできることはないか相談するとか、児童会の話題にして全校生に呼びかけるなどの方策が考えられるが、UR には子どもたちの訴えを受けとめて立往生しているように見える。その背景には、AS も言うように、子どもたちが生活している学級社会や学校社会に対する基本的な理解が足りないように思われる。あるいは、学級、学校にはルールがあるのだから、それをみんながきちんと守れば安心して安全に生活できるはずで、守らない子どもたちが悪いので、叱ってでも守らせないといけない、という考えがあるのかもしれない。住みやすい学校生活をするために、自分たちで知恵を出し合う、創り合うというところまで考えが及ばないようだ。

⑷　学校・地域づくり

UR、NA は 2 年目になり 6 年生担任ということもあり、校務分掌も UR は外国語活動主任、家庭科主任、教科書、NA は特活主任、教科主任（国語、音楽、家庭）、学芸会、校外指導など、学校運営全体にかかわる仕事を任せられている。

アンケートの「困ったこと」の項目で、UR は「外国語活動の研修で、英語が分からなかったこと（勉強したいが、勉強する時間がないこと）」と、NA は「小規模校のため校務分掌が多く準備や学級のことに使える時間が少ないこと。学年のことを全部自分でやらなければならない」と書いている。

同僚との関係性について、UR は「まあまあうまくいっている」とし、「分からないことがあれば、すぐに先生方誰でも質問することができる。また周りの先生方もパソコンの操作など分からいことは私に質問してくれる。職員室では楽しい雑談もできるので、良い関係だと思う」と書く。

NA は「少し苦手な先生がいる」とし、「苦手な先生もいますが、それを含め相談できる

先生がいます。ほとんどの先生は温かく見守ってくださり相談にのってくれます。人間関係でいえば、とても良い職場だと思います」と書く。

2 人は、同僚の先生方に聞きながら教えてもらいながら子どもたちを精一杯動かしているようだ。

保護者との関係では、UR は「まあまあうまくいっている」とし、「電話や連絡帳での連絡は適宜行うようにしている。行事後の懇親会等は皆勤賞（笑）なので、そこでの関係づくりはまあまあうまくいっていると思う。(担任しているクラスの保護者だけでなく、他のクラスの保護者とも話す機会が増えてきたと思う)」と書く。

NA は「クレーマーがいる」とし、「うまくいかないご家庭がありますが、ほとんどの保護者の方が温かく接してくださいます。昨年クレーマーだった保護者のお子さんを今年担任することになり不安でしたが、よい信頼関係を築くことができ、今では心強い味方です。誠意をもって接することの大切さを実感しています」と書く。

地域はどんなところか尋ねると、UR は「少し住みにくい、まあまあ関心がある」とし、「雪がひどくならなければ、住みやすさはまあまあ。新幹線に乗りたいときは少し不便。近所に住んでいる方に会えば、挨拶は欠かさずにしている」と書く。

NA は「住みにくい、まあまあ関心がある」とし、「交通の便が悪く、住むにはとても不便です。しかし、自然豊かで地域全体で児童を育てていこうとする温かな風土があります。地区民運動会を初め、地域人材を活用した民話を聞く会、伝統芸能の継承など、様々な取り組みがあり、学校と地域が密接に関わっているのは、この地域ならではだと思います。また、中学校区での幼少中連携事業を継続して行っており、子どもの 12 年間の成長を支援する基盤が整っていると感じます」と書く。

2 人は、保護者から地域に関心が広がっていくことが読み取れる。NA は、子どもの成長を学校と地域とのかかわりでとらえる視点を持てていることが分かる。

５　整理

アンケートをもとに、新採用教員、2 年目教員がとらえる即戦力とは何かを見てみよう。

ここから、新採用教員、2 年目教員にとって即戦力とは、今一番欲しい力、身に付けておきたい力ととらえられそうだ。

（表 2）　AS の即戦力

8 月	12 月
自分なりのビジョンを持っている人（何に関しても）。意欲のある人。常に変化を求める人。迅速に対応できる人。コミュニケーション力。総合的な人間力がある人だと思います。	子どもを見る目とコミュニケーション力だと思う。若いだけで子どもたちはついてくるが、その中で子ども同士の関係や一人一人の性格・考え方を見取れるかで対応が変わってくると思う。また、悩んだ時に周りの先生に聞けるコミュニケーション力が大切になる

UR、NA の即戦力

UR	NA
まわりの先生方の仕事を真似してでも同じように行動すること。	教壇に立った時、新任であっても一定水準の指導力が求められる、それが即戦力だと思います。即戦力を身に付けるためには、（附属だけでなく）様々な学校・先生の授業を見ることが最も大切だと思います。

AS は、8 月では「ビジョン、意欲、迅速、コミュニケーション力」と漠然としていたものが、12 月では「子どもの理解力とコミュニケーション力」と具体的になる。2 年目の NA は「一定水準の指導力」といい、NA はもっとストレートに「周りの先生方と同じことができる力」と言う。

そのために、コミュニケーション力が必要で、たくさんの授業を見ることが大切だとする。即戦力は、「聞いて、見て真似て得る力」と言えそうだ。

その内容は、これまで見てきたように個々人によってそれぞれ異なる。

AS にとっては、「子ども理解」では様々な子どもの理解であり、「授業づくり」では発問の仕方であり、「学級づくり」では基本的な理解であり、「学校・地域づくり」では同僚の先生方や保護者との関係などである。UR にとっては、「授業に参加しない児童への指導」であり、NA にとっては、「特別支援を要する児童の理解と指導」である。

また、その内容は、個人内においても、UR が「参加しない児童への指導」から「発問の仕方」に移るように変化していく。それは、課題を解決する場合もあれば、新たな課題として生じる場合もあるだろう。

それでは、即戦力をつけたいと願う原動力は何にあるのだろうか。AS は主任の教室を

モデルにしているが、それだけだろうか。そのことを、アンケートでは「子どもに伝えたいことは何か」と尋ねた（表）。

（表 3）　子どもに伝えたいこと

AS	UR	NA
・勉強は楽しく心を豊かにする。 ・自分自身や自分に関わる人を大切にする。 ・夢や目標を持つ大切さ	・勉強は楽しい！ということ。 ・これから何にでもなる可能性をひとりひとり持っている！ということ。 ・友達や家族がいれば何とかなる！ということ。	・多様な考えを認め、受け入れられる人になってほしい ・自分で考え、行動できる人になってほしい ・困ったときに助けを求めたり、困っている人に手を差し伸べたりできる人になってほしい。

AS は、「勉強は心を豊かにする」などを、UR は「勉強は楽しい！ということ」など、NA は「多様な考えを認め、受け入れられる人になってほしい」などをあげている。

各自の教育への思いを実現する方法を模索し、うまくできない自分に苛立ち悩み、身近なモデルをまず手がかりに見ながら聞きながら技を身に付けようとしている。

UR は、3 月の訪問時には、授業もスムーズに展開し、子どもたちも落ち着いて学習に参加していて、2 年間での子どもたちの成長と UR の成長を見取ることができた。UR 自身も次のように書いている。

自分が成長しているかどうかはあまり実感がわきませんが、子どもたちは絶対に成長していると思います。

自分が即戦力だったかは定かではありませんが、まわりの先生方に助けられ、子どもたちに助けられ、保護者の方々に助けられがんばってきたなぁ～とアンケートを書きながら思いました。

卒業式まで残り５２日となりました。最高の卒業式を迎えられるように一日一日を大切に過ごして行きたいと思います。

即戦力とは、教師の入口に立って自分なりの教育観を実現するために歩み始めるための教育方法といえよう。

教育の営みは実践を積み重ねる中で広がり深まっていき、それと連動するように教育方法も多様になり深まっていく。UR をはじめ新採用教員、2 年目教員は自分の課題と向き合いながら、次の高みをめざして探求し続けるに違いない。

Ⅲ　学生の資質能力の客観的評価（学校教育支援実習）

本学類では、平成 24 年度に学校ボランティア支援室を設置し、平成 27 年度に 2 年生からは学校ボランティアが一定の時間を満たせば学校教育支援実習として単位認定をして学校ボランティアを推進している。

ここでは、学生の学校ボランティアの実践的指導力をどのように評価し、学生がどのような力をつけているかを見てみよう。

1　学校教育支援実習の概要

本学類では、現在福島市、郡山市、伊達市、国見町、大玉村、棚倉町、桑折町の 7 市町と学校ボランティア協定を締結している。

（表 4）　学校ボランティア活動人数・活動校園数・活動日数

	福島市	郡山市	伊達市	国見町	大玉村	棚倉町	桑折町※1	合　計
活動人数	41	5	6	2(3)	(1)	(6)		54(64)
校 園 数	13	3	3	1※2	※2	※2		20
活動日数	396	83	56	6				541

※1：桑折町とは、平成 29 年 3 月 15 日に締結したばかりである。
※2：国見町（少年仲間づくり）、大玉村（土曜学習）、棚倉町（夏季学習会）と(　)は活動人数

（表 5）　学校ボランティア学年別活動人数

学　年	2　年	3　年	4　年	合　計
人　数	4	23	27	54

学校ボランティアの活動範囲を、はじめは学校現場での補助としていたが、国見町、大玉村、棚倉町との協定では教育委員会主催で行う児童生徒の学習支援事業も活動範囲として広げることにした。これは、学生の実践力を高めるねらいもあるが、棚倉町のように近くに大学がなく大学生と触れ合う機会も乏しい児童生徒への学習支援を強く求める教育委員会のニーズに応える意義もある。棚倉町は大学のある福島市から約 100ｋｍ離れているが、学生は最寄りの新幹線駅まで新幹線で往復し、棚倉町はそこから町まで公用車で送迎して活動を行った。夏季学習会には 6 人の学生が参加し、2 日間で 35 人の小学生が参加して成果があったという報告があった。

学校ボランティアは、教職履修登録をした 2 年以上の学生ができる。その内学校現場での活動を学校教育支援実習の対象とし、教育委員会主催の学習支援は学校ボランティアとした。

学校教育支援実習には、学校教育支援実習Ⅰ とⅡがある。その要件は、学校ボランティア活動時間とそれを記入した実習記録表、事前事後指導とカンファレンスに参加した時間とそれを記入した記録表、報告書になる。実習日誌のような記録は課していないが、ノートなどに記録を取ることを薦めている。

説明会等に参加して事前指導を受け、活動時間が 40 時間を超え、2 時間以上カンファレンスに参加し、終了時に 1200 字程度の報告書を提出し、それを基に事後指導を受けてⅠ

（1 単位）の資格が得られる。Ⅱ（2 単位）は活動時間が 85 時間以上となる。学生は、必要な書類をそろえて教務課に提出する。教務課はそれを学校ボランティア担当に届け、担当が審査をして実習運営委員会で合否の判定を行う。申請時期は、1 月 20 日までならいつでもできる。また 4 年生までにⅠ、Ⅱの 3 単位まで取得できる。

学校ボランティア支援室には公立学校を退職した研究員が 2 人いて、相談やカンファレンス、学生や活動校との連絡調整、広報など実習運営委員会の学校ボランティア担当を補佐して学生の活動支援を行っている。

（表 6） 学校教育支援実習

1. 学校教育支援実習Ⅰ（1 単位）

No.	学年	氏名	活動校	活動期間	活動時間（日/時間）	事前・事後等指導時間	実習報告書
1	2	TU	A 小学校	平成 28 年 5 月 20 日～ 平成 28 年 11 月 24 日	17 54.5	事前 1 事後 1 カンファレンス 10	有
2	2	SA	B 小学校	平成 28 年 5 月 25 日～ 平成 28 年 11 月 30 日	14 59.2	事前 1 事後 1 カンファレンス 2	有
3	3	SH	C 小学校	平成 28 年 11 月 14 日～ 平成 29 年 1 月 16 日	7 48	事前 1 事後 1 カンファレンス 3	有
4	3	IA	D 小学校	平成 28 年 8 月 26 日～ 平成 29 年 1 月 13 日	13 73.5	事前 1 事後 1 カンファレンス 2	有
2. 学校教育支援実習Ⅱ（2 単位）							
5	3	AI	E 小学校	平成 28 年 8 月 26 日～ 平成 29 年 1 月 13 日	17 104.5	事前 1 事後 1 カンファレンス 2	有
6	3	KH	F 小学校	平成 28 年 9 月 1 日～ 平成 28 年 11 月 14 日	13 85	事前 1 事後 1 カンファレンス 2	有
7	3	KS	G 小学校	平成 28 年 5 月 19 日～ 平成 29 年 1 月 16 日	37 246	事前 1 事後 1 カンファレンス 3	有

今年度は、64 人の学生が登録し、学校現場で活動したのが 54 人で、教育委員会主催の活動をしたのが 10 人である。

学校教育支援実習は平成 26 年度入学生から始まったもので、今年度は 2 年生 4 人 3 年 23 人が対象になる。その内 2 年生 2 人、3 年生 5 人が申請し合格している。

２　「実践力評価基準」（資料 4）

学校ボランティア支援室では、学生の活動を評価する指標であり、学生が活動を自己診断しながら振り返る指標として、「福島県の未来を創造する能動的な教師としての基礎的実

践力評価基準（試案）」（「実践力評価基準」）を作成した。これは、学生は活動をして終わらせる傾向があるので、活動と実践的指導力と結び付けるねらいがある。また、活動をしていて課題に出会ったときに、大学で学んでいる理論と結び付ける手がかりになるようにしたいというねらいがある。

作成の経緯と詳細は昨年度の報告にゆずるが、簡単に触れておきたい。

この指標は、学校の出来事を「子ども理解」「授業づくり」「学級づくり」「学校・地域づくり」の 4 項目でとらえている。理由として、1 つは学生が学校の出来事をとらえやすくしたことである。2 つが、これからの学校教育は、「子ども理解」を基盤に「授業づくり」「学級づくり」「学校・地域づくり」を創りあげていく実践的指導力が求められているからである。

福島県は自然災害と原発事故災害があり、復興にはまだまだ課題があり多くの時間を必要としている。子どもたちが福島の未来を創造する大人に成長する教育活動を実践できる教師に育ってほしい、という願いも込められている。

縦軸に 4 項目を学年ごとに段階的におき、横軸に活動を省察的に見る視点として「発見」「省察」「創造」を置いて表にした。先の新採用教員や 2 年目教員のように個々の課題は多様でありすべてがこのように段階をふむのではなく、モデル例として示した。運用しながら改善していくことにしており、まだ試案の段階である。

学校の出来事を語る共通の言葉として、学生も指導者も同じようにイメージできる言葉として活用している。

3　学校教育支援実習の「学び」

学生は、学校教育支援実習でどのような「学び」をしているのかを、2 年生 TY、3 年生 SH の 2 人の「学び」から見てみよう。

⑴　2 年生 TY

TY は、特別支援クラスで院内学級の教員を志望している。特別支援の研究会にも参加していて、そこで知り合った現職教員から誘われて、5 月から教員が所属する A 小学校で活動を始める。大学の授業のない水曜の午後にほぼ毎週通い、1 日 3 時間程度の活動を 11 月までに 54.5 時間行っている。活動ごとに個別のカンファレンスに 8 回、合同カンファレンスに 2 回参加して、活動の振り返りを行っている。1 単位を取得している。

報告書をもとに、実践力評価基準の 4 項目で検討してみよう。

活動は、特別支援学級の 3 人の学習、給食、清掃の支援を行っている。学習支援では、掲示物作成のハサミの使い方など、国語の音読支援、交流学習では付き添って支援をしている。

TY は、学んだこととして、2 つあげている。1 つが、「子どもの発言や行動に対する教師（支援者）の言葉かけの重要性である。

子どもの何気ない発言や行動に教師が敏感に反応して返すと、子どもも敏感に反応して、それで子どもとの信頼関係が広がり深まっていくと言う。そして、「子どもと良い関係性が構築できなければ、子どもの成長を妨げてしまう可能性があります。子どもの成長を支え、育むためにも子どもと教師（支援者）が共に『思いや願い』を言葉あるいは行動に表し、伝え合い理解することが大切です」と書く。その手掛かりとして、物事には「ストーリー」があると特別支援の先生から教えてもらったとも書き、「子どもの実態をしっかりと把握し、一人ひとりに応じた指導や支援ができるよう今後も活動したい」と結ぶ。

2 つが、特別支援学級における「交流および共同学習」の在り方についてである。交流学習自体は良いとしながら、子どもの視点に立たなければ特別支援学級と通常学級の間に壁ができて、特別支援の子どもが通常学級の子どもたちとの交流を避けてしまうのではないかと危惧する。そして、「教師が連携し、子どもの実態を把握したうえで、適応しやすい環境づくりや配慮が必要だということを学んだ」と結ぶ。

TY は、「子ども理解」を基盤としながら、子どもとの信頼関係を築くための手法を探り、学習支援を通して特別支援学級の「授業づくり」、交流学習支援を通して通常学級との共同連携について深めていることが読み取れる。

⑵　3 年生 SH

SH は、5 月の学校ボランティア説明会に参加し、一度支援室にも来て相談している。教育実習などもあり、11 月 14 日から C 小学校の 3 年生のクラスに入って活動を開始する。毎週月曜日の 9 時から 16 時までの 7 時間、1 月 16 日まで 7 日間活動して 1 単位を取得している。

活動のきっかけは、教育実習の経験にある。

> 私は、6 月に教育実習を行った。その時、授業を組み立てることの難しさはもちろんのこと、子どもたち一人一人と関わり信頼関係を築くことの難しさを痛感した。その経験から多くの課題がみつかり、少しでも解決の糸口につながればと思い学校ボランティアに参加した。また、公立学校の普段の子どもや授業の様子を知りたいと思ったことも学校ボランティア参加を決めた理由の一つである。

と書く。

教師になることへの不安も含めて、公立学校で子どもたちや授業と向き合ってみようという思いが伝わってくる。

活動は、授業中の子どもたちへの学習支援と放課後の担任教員の一部の作業を行っている。具体的には、授業準備の手伝、授業中つまずいた子どもの補助、子どもたちが集中できないときの声かけなどである。放課後は、担任と教室の清掃のし直しや子どもたちの作品にコメント書きなどもしている。

SH は、教育実習とは違って、気持ちに余裕をもって子どもたちの授業中の様子や休み時間の過ごし方などをじっくりと見ることができ、子どもたちと積極的にかかわることができたようだ。

SH は、このクラスの現状を次のように書いている。

基本的に全員が元気で明るく素直であるが、授業を真剣に受けている子と受けられない子の差が激しく、休み時間と授業の切り替えがうまくできない場合や、発達障がいがある子を中心とした子ども同士のけんかなどにより授業があまり進まないことが多い。

特に男子に多いことであるが、集団としての意識が少ないという印象である。ゆずり合ったり仲間と仲よく遊ぶ、折り合いをつけるなどの意識が少ないために、すぐにもめ事へ発展したり、相手を考えた言動が少ない子がしばしばいた。

そのような中で、SH は、「授業時間であると自覚できるような声かけや、授業を受ける態度はどうあるべきだろうというような声かけをすることで、自分できちんと気持ちを整理させたいと考えて」、その都度子どもたちのそばに行って声かけをしたのだろう。

SH は、子どもたちの様子について担任に相談をする。担任からは「家庭環境も原因の一つかもしれない」という話があり、「子どもの背景も視野に入れて、日々の学校生活における子どもの様子をとらえ、適切な働きかけをすることが重要だ」と気づき、「私は、子どもたちに対して、みんな違ってみんないい、という考えや相手を思いやる気持ちを抱くことができるように、積極的に子どもたちの良いところを口に出して、遊びの中で協力や仲間意識を促す声かけを行う」のである。

そして、「自分の目で見た子どもたちの実態から、自分にできることは何だろうと考え働きかけることができた」と評価し、「しかし、読み取りが足りない点や子どもに寄り添いきれない部分が残されている」とし、「残りわずかの活動で、それらの点を少しでも改善することができるように意識して取り組んでいきたい」と結ぶ。

ギャングエイジといわれる子どもたちと向き合い、SH は子どもたちの仲間意識を高めようと声かけを実践しながら、仲の良いまとまりのある学級をつくるにはどうしたらよいのか、自分が担任だったら何ができるかを模索していることがうかがえる。

⑶　整理

2 人は、活動しながら自分の目の前で起きている出来事をまとめる中で、4 つの項目で整理し意味づけをしようとしている。また、断片的なできごとを関連付けようとしていることもうかがえる。

しかし、その整理や関連付けは自己評価で必ずしも客観的とは言えない。目の前の現象を、子どもの資質や家庭環境などの見えやすい表面的なものではなく、多面的に探らせた

い。

４　合同カンファレンスでの「学び」

これから求められる教師の専門性は、技術的熟達と省察的実践にあると言われる。実践的トレーニングに加えて、対話的省察が重要となる。学校教育支援実習では、「考える力・対話する力・学ぶ力・関係を育む力」の育成をねらいに、カンファレンスを必須時間としている。

カンファレンスは、学校ボランティア支援室の研究員 2 人で行っている。個別のカンファレンスでは、学生が活動後に、都合の良い時間に支援室に来て行っている。

今年度は、それに合わせて、「学生同士の対話」を重視して、合同カンファレンスを行った。各月 1 回、第 3 水曜日の 5 限（16:20～17：50）に大学で行った。これは、昨年度から始めて効果の大きさに期待したからである。

5 月から始めて 7 回行い、のべ 30 人が参加した。8 月と 2 月は、本学人間発達文化研究科主催の「教育実践福島ラウンドテーブル」に代えた。9 月は、学生の夏季休業で計画しなかった。

（表 7）　合同カンファレンス参加人数

月	5	6	7	8※	10	11	12	1	2※	合計
実施日	5/18	6/22	7/20	8/8	10/19	11/16	12/14	1/18	2/11	
人数	8	5	1	(15)	3	5	3	5	(12)	30

※　「教育実践福島ラウンドテーブル」（福島大学人間発達文化研究科主催）に代える。

（表 8）　参加回数と人数

回数	1	2	3
人数	15	3	3

合同カンファレンスは、支援室の研究員がファシリテータ役で進行する。12 月 14 日の合同カンファレンスを例に簡単に進め方を見てみよう。当日の参加者の人数で 1 人のおおよその報告時間を決めて始める。この日は 3 人の学生が参加したので、1 人 25 分程度の配分になる。

はじめに KS が、G 小学校での活動を 15 分程度報告する。主に T 君や K 君の気になる行動の報告だった。他の 2 人の学生から質疑応答がある。支援室の研究員からも「個別にみることと、学級全体から観察してみると見方が変わるかもしれないよ」という助言もあった。少し超過して 40 分程度かかった。次に SM から A 小学校での活動報告があった。TY と同じ学校でやはり特別支援学級で活動している。子どもたちの姿が、TY とは違う視点で語られていた。20 分程度で終了し、次に SH が C 小学校の活動を報告した。「5 回活動していて、やんちゃな子どもたちよりも、真面目な子どもたちがかわいそうになった。様々な支援が必要だと思う」と語り、2 人との応答があった。「悪いところばかりみて注意するのではなく、良いところを生かしてつなげられないかな」という意見が SH に響いた

ようだ。20 分程度である。最後に振り返りカードを書いて終了した。

学校ボランティア活動人数 54 人のうち、参加者平均は 4.3 人と少なかったが、自らの活動を語ることで整理し、他の学生と応答することで多様な視点で見直すことができ、大学での学びと結びつけた発言も生まれてきている。

先の TY と SH は、3 回参加している。次に、2 人の合同カンファレンスでの「学び」を振り返りカードをもとに整理してみよう。

⑴　SH の「学び」

SH は、3 回参加している（表 9)。

（表 9）　SH の振り返りカード

回	月日	内容	人数
1	11/16	他の学校の子どもたちの様子は全く異なり、それに対し、学生のみんながとても観察して子どもの読み取りを深く考えていて、私も見習いたいなと良い刺激を受けました。	5
2	12/14	今回は、5 回目のボランティアをしてから参加しました。以前よりも今の方が子どもたちの信頼を感じるし、私も一人一人のことが少しずつ見えてきたと思います。今後は、子どもたちの様子が見えてきた先にあの子たちの背景や、心の中の声に気づくことができればいいなと思います。 また、他 2 名（KS ちゃん、SM ちゃん）の経験に対する先生方のアドバイスも私自身に取り入れて、３－２の子どもたちの支援をして、少しでも良い影響を与えられればいいなと思います。	3
3	1/18	最後の合同カンファレンスでは、自分が今悩んでいることについて、他のボランティアの人はどのように対応するかを知りたくて質問した。 自分と似たような考えをもらえて、その考えに自信をもてたし、新しい考えをもらえた点については今後の活動に取り入れていきたい。	5

1 回目は 11 月 16 日に参加している。この日は 5 人が参加しているが、SH は 11 月 14 から学校ボランティアを始めばかりであまり報告することがないということで、最後に 5 分程度の報告の時間をとった。

SH は、薬を服用している障がいのある子が 2 人いて支援員がついていること、子どもたちは授業中でも自由に抜け出せるし、教師の指示が通らないと学級の様子を報告し、頭のいい子は道徳心がないのかなと感想を述べている。

振り返りカードには、「他の学校の様子とは全く異なり」と書き、「みんながとても観察していて子どもの読み取りを深く考えていて私も見習いたい」、「良い刺激を受けました」と書く。

この日参加した他の 4 人はどう振り返っているかを見てみよう。

KH は、午前中に事後指導を受けていて、活動最後の日だった。

今回は 3 年生が多く友だちでもあったので、その人の性格も分かるし子どもたちと接する様子もイメージできたので、質問しやすかった。また、自分の感じたことに対し、

みんなで考えたことによって（特に KS 君の国語と音楽の子どもの様子が違うのは発問の仕方が…）自分の考えを広めることができた。

午前中の事後指導でもお世話になりました。自分の目指す教師像についてもう少し考えてみます。

KH は、他の学生との応答をとおして、教科の発問の違いにありそうだと新たな気づきをしていることが分かる。「自分の目指す教師像」は、事後指導で「どんな教師になりたいか」の問いへの回答である。

KS は、次のように振り返る。

今回のカンファレンスを通して、今後のボランティアへ向けて、子ども一人ひとりの関心や思考を見極めようと思いました。全体ばかりに着目するのではなく、個人に着目して子どもを見取っていかなければならないと思いました。他のボランティア学生の報告を聞くことができて良かったです。

KS は、他の学生の報告や応答を聞いて、学級全体を漠然と観察していたものから個人に着目して見取ることに気付く。

2 人からも、他の学生の報告や応答が次の活動の気付きを生んでいることが分かる。他の 2 人は、途中退席して未提出になっている。

2 回目は、12 月のカンファレンスに参加する。11 月から毎週通い 5 回目活動後のカンファレンスである。「以前より今の方が子どもたちの信頼を感じるし、私も一人一人のことが少しずつ見えてきたいと思います」と、自信をもって報告していた。

先に報告の内容を整理しているので、他の 2 人の振り返りを見てみよう。

（KS）

他の学校のボランティア活動を聞いて、自分の活動にも生かしていきたいと思いました。今回出てきた自分の気になる点について、これからの活動で解決できるようにしていきたいと思います。

子どもへの働きかけにおいても、その子供をよく観察し、背景や理由を知って深く関わっていきたいと思います。そのために、多様な視点を持っていたいと考えます。

（SM）

今までは、自分と子どもたちとのづくりというところに意識を置いていたけれど、カンファレンスに参加して、子どもたちをどういう視点で見るかという点で参考になった。

次回は、特別支援学級での支援から通常学級で支援する際に役立つことは何だろうと

いう視点を持ってボランティアに参加したいです。

○　どう学習意欲を持たせるか、引きつけるか　→　ゲーム感覚、言葉かけ

○　学生と子ども 1 対 1 から集団として

このカンファレンスをとおして、3 人は、「子どもの背景や理由」と「子どもと集団」の課題を共有し、次の自分の活動に生かそうとしている。

3 回目は、1 月の最後の会である。5 人が参加し、1 人が 15 分程度と短い時間の報告になった。

はじめに AI が「いいクラスとは何？」と問題提起して、「今活動しているクラスは、去年学級崩壊をしたクラスで、今の担任に代わって子どもたちが落ち着いていているし、担任もどならない穏やかな先生だ。でも、子どもたちは先生の真似をしているように感じて、先生のカラーにしている学級王国でないかと考え、これでいいのかと悩んでいる」と報告する。学級崩壊の経験などの応答があり、教師の役目とは何か、良い学級とは何かが課題となった。

次に、IA が、「子どもたちが友だちのように接してくるんだけど、ボランティア学生って何？教師の威厳を示したい」と問題提起をする。AI は「担任からあくまでも頼りになるお姉さん、と言われた」と言い、AT は「教師をしている母に相談したら、人助けと言われた」と言い、SH は「子どもたちのためになること」と言う。

次に SH が報告をした。

「2 人の発達障がいのある 2 人の学習支援をしていること、子どもたちの仲間意識が薄いこと、けんかが 1 日数回起こること、からかいやけなしがあること、その子どもたちに仲間といるのがいいことだとどう伝えたらいいか悩んでいる、みんなならどうする」と語りかける。

AI は、「子どもが家庭のストレスの発散の場としてとらえているのではないか」と言い、5 年生の時の学級崩壊の経験を踏まえて「嫌いな子を好きになるのは本音でぶつかることだ」と言う。

IA は、「子ども同士をつなぐ」と言う。

それを受けて、SH は、「いっしょに遊ぶ作戦、ほめる作戦をやってみる、子ども同士を比較することはしたくない」と述べる。

次に AT が、暴れる、暴言をはくという気の荒い子どもの支援を頼まれて活動していること、体育の時間にその子と 2 人で他の子たち違うことをしたことを言ったあとに、このクラスでやっていていいのかなと悩みを語る。

最後に、KS は、悩みがあまりなく活動していると言い、不登校気味の K 君のことを報告して終了した。

SH は、振り返りで、「自分が今悩んでいることについて、他の人はどのように対応する

かを知りたくて質問した」と書き、「自分と似たような考えをもらえて、その考えに自信をもてたし、新しい考えをもらえた点については今後の活動に取り入れてきたい」と書いている。

KS は「自分の学校ではない、子どものけんかや子ども同士のかかわりについて、ボランティア学生として何をすればいいのか考えた。他のボランティア学生に比べて自分はあまり悩みを持たずに活動していると思った。今後問題意識をもって活動していきたい」と振り返る。

IA は、「私自身が日々活動して感じていること、思っていることを他のみんなと共有することができ、また他の人の活動の中での悩みを聞くことができた。残りの活動で今日のことを活用していきたい」と振り返る。

AT は、「自分とは違うが、みなさん悩みをもっているのだなと思った。クラスつくりや子どもたちへの接し方など多くの悩みを聞くことができた。自分だけが悩んでいるわけではないと知って良かった。もっと子どもたちと付き合って向き合っていきたい」と振り返る。

SH は、1 回目では「みんながとても観察して子どもの読み取りを深く考えていて、私も見習いたい」と漠然ととらえていたのが、2 回目では「私も一人一人のことが少しずつ見えてきたと思う」と書き、3 回目では「自分の考えに自信を持てた」と、「子どもたちが仲良く生活する学級づくり」とそのための「つなぐ方策」を考え、活動に移す。

参加した他の学生も、自己の活動を語り応答をとおして次の活動の方策を見いだしている。

⑵　TY の「学び」

TY は合同カンファレンスに 3 回参加しているが、ここでは、特別講師として学内の特別支援教育担当の高橋純一准教授を招いて行った 3 回目の学びについて見てみよう。

学校ボランティアで学校のニーズで多いのが特別支援を要する子どもの支援である。学生は、学校の気になる子どもがいるクラスに配置されることが多く、学生の悩みも多く切実である。

そこで、学内の専門家といっしょに合同カンファレンスができないかと高橋先生に相談したところ快く引き受けていただくことできて 7 月の会に実現した。しかし、7 月 20 日ということで、4 年生は採用試験直前、2・3 年生も前期試験前だからか、参加者は TY1 人だった。

当日は、高橋先生、TY、研究員 2 人の 4 人で行われた。

はじめに、TY が活動報告をした。

特別支援学級の子どもの状況を説明したあと、これまで取り組んできて気になっている４つの項目について話題提供した。

１つが、子どもが交流学習で通常学級に行きたがらないことについてである。高橋先生

から、通常学級担任と特別支援学級担任とが打合せをして、事前に内容が分かって声をかけると「学び」が違ってくるので、TY は先生に事前に聞いて子どもに伝えたらどうだろうと助言があった。

２つが、段ボール事件である。

子どもが抱えて持つくらい大きな段ボールを見つけて、担任に家に持ち帰りたいと言ったところ、TY は危険だからだめと言うだろうと思っていたら、担任は容認して持ち帰らせた。本当にいいのかという問いである。

高橋先生から、子どもに「持ち帰って何にするの」とまず主張させることだ、次に子どもが何に興味を持っているのかを掘り下げて、2 人で対話をすることが大事だと助言があった。頭ごなしに危険だからだめだと否定するのではなく、一人の人として認めて、本人が納得すように話し合うことだと言う。

3 つが、子どもが担任に「通常学級の子どもが（特別支援学級の）〇〇君を障がいと言っていたよ」と報告して、担任が「だからどうしたの？」と応えていたが、それでいいのかという問いである。TY は、その通常学級の子を注意しなくていいのかと考えたようだ。

高橋先生からは、まず子どもが担任に報告したことを受け止めたい、と話しがあった。子どもに障がい名を名付けてその子を分かったように思うが、北欧にはそんな文化はない。程度の差として、どの子も一人の人として認めていると話された。

4 つが、担任から言われた「物事にはストーリーがある」についてである。

高橋先生は、子どもが行動するときには目的と理由がある。行動が悪いか良いかの判断はしていないので、善悪の意味が分からない。この子どもたちには、社会的善悪の判断と行為の区別や叱られたことを納得することは大変難しい。だから、〇△×で可視化してやったり、今やったことをどう思うと聞き返したりすることで行動の制御を記憶させることが大切になる、と助言があった。

TY は、振り返りに「段ボール事件について、私が考えていた以上の中身の濃い内容になり正直驚きました」と言い、「たった一つの出来事でも多くの視点からたくさんのことをとらえることができ、そこには子どもの成長につながる大事なヒントがいくつも隠されているため、教師（支援者）の言葉かけの工夫や配慮から、子どものコミュニケーションが広がり、信頼性も深まるのではないかと感じました」と書く。

また、「今回のカンファレンス会では、特に『一言』や『言葉かけ』の重要さに気づくことでき、子どもの『一言』や教師（支援者）の『言葉かけ』の工夫や配慮から、子どもとのコミュニケーションが広がり、信頼性も深まるのではないかと感じました」とも書く。

そして、「夏季休業中に、1 学期の振り返りとまとめを行い勉学に励み、2 学期からの活動につなげていくことができるようにし、教育活動の基盤である『子ども理解』について視野を広くしながら考えていきたいと思います」と結ぶ。

TY は、専門的知見を得て、「子ども理解」が行動に表出される現象だけを見るのではなく、その理由を理解すること、何よりも障がいというくくりでとらえるのではなく一人の

人として認めるところから始めようと思ったようだ。

⑶　整理

学生同士による合同カンファレンスは、語り手は活動の整理になり、対話をとおして、語り手は多様な視点で見直し、聞き手は自分ごととして次の活動に生かしている。

専門的な知見を得ることで、学校の出来事が深く理解され、活動も深まることが分かった。

学生は、活動の意味を問うとき、活動を多様な視点で振り返ること、専門的な知見から見ることで、客観性的評価が高まることを学んでいる。

Ⅳ　学校インターンシップの構想・実施

１　学校インターンシップの構想

学生の学校ボランティアでの「学び」は、「子ども理解」、「授業づくり」にあり、次に「学級づくり」となる。「学校・地域づくり」への関心は低い。新採用教員が 1 年目、特に夏休みまでの 4 か月間の課題としてあげられるのが、各教科の授業の基本的な進め方や授業に参加しない子どもへの対応、日常指導の進め方などである。

これまで大学での実践的体験的な「学び」に教育実習と学校ボランティアがあるが、学校ボランティアを活動してきた新採用教員の実態から学校現場との差が縮まっていないことも分かった。そこで、より学校現場に近い実践的体験的「学び」として、学校インターンシップを構想し、昨年度初めて試行し、今年度 2 回目の試行を行った。

ここでは、学校インターンシップの構想と計画、実施、評価について整理した。

⑴　教職課程検討委員会

昨年度の調査研究で、新採用教員の参与観察を整理する中で、大学で学んだ実践的指導力が即戦力として十分に機能していない実態が見えてきて驚いた。そこで、年度途中からではあったが、学生からの希望もあり、学校ボランティアを活動している学校、教育委員会の理解のもとに学校インターンシップを試行として行った経緯がある。

学校インターンシップは、制度化されていないので教育関係者にも理解されていないため、実施するにあたっては、学生はもちろん、学校、教育委員会の十分な理解が必要であった。そこで、今年度は、学校インターンシップを構想するにあたって、教職課程検討委員会（以下　検討委員会）を設けて行うことにした。

①　組織

組織は、福島県教育委員会、福島市教育委員会、伊達市教育委員会、国見町教育委員会、福島市立中学校長、伊達市立小学校長、小学校教員、中学校教員の 7 団体で構成した。

全県の教育行政を担う福島県教育委員会指導主事、学生がしばらく継続して学校ボランティアを活動している学校が所在する福島市教育委員会指導主事、伊達市教育委員会指導主事、国見町教育委員会指導主事、学生が学校ボランティアを活動している福島市立第一中学校長、伊達市立保原小学校長、公立学校から郡山市立第一中学校教諭、附属学校園から付属小学校教諭、大学調査チーム 3 人の 11 人である。

②　目的

目的は、関係教育委員会と大学とが教職課程検討委員会を設けて、連携協力して、学校インターンシップの実施体制及び実施内容・方法を検討し、実践的指導力の解明と教員養成カリキュラムの検討をすることである。

③　内容

内容は、新採用教員のインタビュー・アンケート調査、２年目教員の参与観察・アンケート調査をもとに学校現場の実践的指導力を検討することと、学校インターンシップ実施内容と方法の検討があげられる。

④　第１回検討委員会の実施

第１回検討委員会を平成 28 年 8 月 23 日（火）14 時から 16 時まで、本学類中会議室で全員出席して行われた。

議題は、平成 27 年度の取組の成果と課題・今年度学校インターンシップの検討である。

議論内容の１つが、学校インターンシップの効果についてである。

中学校教諭から、中学校は 2 月から 3 月は受験や卒業を控え難しい。教育実習とどう違うのか、即戦力が何か曖昧な中で、1 週間で何ができるのか、形でだけのものになってしまわないか、受入れ校のメリットは何かという質問が出された。

昨年実施した小学校長から、「学生は、2 週間後に教壇に立つという覚悟が違う。大いに役立つと思う」と言い、「先生方は、すぐに同僚になるのだから教員を育てたい、本気で伝えようとした。負担感はあったかもしれないが、聞かれなかった。それは、先生方が 1 年間学校ボランティアとして学校を支援してくれた 2 人の学生の活動を見てきているからだと思う」と語った。

２つが、学校インターンシップの制度化についてである。教育委員会指導主事から、教員免許取得前の学生ができる実習内容を整備し実習の手引きが必要だという意見があった。

学校インターンシップは、教育委員会、学校長、教員の理解がなくてはできないこと、学生と学校とが信頼関係で結ばれていること、学校は学生を育てようという意識があることなどが確認できた。

⑤　第 2 回教職課程検討委員会

第 2 回は、平成 29 年 2 月 23 日（金）に 10 時から 12 時まで、学校インターンシップ実施校で検討委員全員と実施校校長が参加して開催された。

内容は、新採用教員・2 年目教員の調査内容について、学校インターンシップ事業についてである。

新採用教員・2 年目教員の調査内容を報告し議論した後、3 校時の授業を参観し、学校インターンシップ事業について話合いをもった。

新採用教員・2 年目教員調査では、県指導主事から「授業づくり自己診断表」で、自己診断していることは意義があるという意見があった。

3 校時は道徳の授業で、はじめに T1 の担任が導入で課題を提示し、T2 の学生が資料を読み、学び合いの展開を受け持ったところの途中までを参観した。

参観後の話し合いでは、T1 ・T2 の役割と学校のウィンとは何かとインターンシップの

意義について話題になった。

県指導主事から、インターンシップを T2 としてプリント配布などを想定していたが、T1 になったら、学校のウィンとは何か疑問が残ったと問題提起があった。

昨年の実施校校長から、「先生方も（学生を）育てようという意識があった」と、今年の実施校校長からは、「教員免許が課題なら二種免許、臨免等の制度化を図ればよいのではないか。実践力が求められているわけだから、壁を乗り越えられないか」と、中学校長からは、「中学校は、学生を学級担任につけたらよいか教科担任につけたらよいかなどノウハウができていない。受入れ校も限定されるだろう」という意見が出された。

町指導主事からは、現場では即戦力が求められているが、学級経営や子ども理解は現場に出てみて分かることではないか。また希望者とすると採用予定者の全員ができるわけではないので、根本的な解決にならないのではないかという意見があった。

担任の指導のもとに仮担任制をとる場合、検討課題があることが確認できた。学校ボランティアのようなウィンウィンではないにしても、教育実習のような負担感はないようだ。

⑥　整理

学校インターンシップによる実践的指導力育成は、これからの「教員養成・採用・研修の一体化」の中で議論検討していく必要がある。「教員 1 プロブレム」は、目の前の喫緊の課題である。その課題解決に向けて、教育委員会、学校、大学、学生が連携協働して作りあげていくことが大切だということを確認できた。

２　学校インターンシップ計画・実施

⑴　計画（資料参照）

①　ねらい

○　教師の仕事を理解し、大変だが楽しいやりがいのある仕事だと実感し、4 月から始まる教師の仕事に見通しと希望を持つことができる。

・ 5 日間の週指導計画を立てることができる。

・ 担任の補助として計画にそって指導支援し、実践的に学級運営の理解を深める。

②　対象学生

○　教員採用試験に合格していること

○　同じ学校で、学校ボランティアをしばらく継続して活動していて、教師との信頼関係もあり、子どもたちとの関係性も良好で、学校インターンシップを希望する学生

③　活動校

希望する学生が学校ボランティアを活動している学校・学年学級

④　活動期間

○　学生が卒論を提出する 2 月はじめから、学校が年度末の繁忙期になる前の 3 月上旬の期間

○　学校と学生の都合のつく 1 週間程度

⑤　内容

○　担任の指導のもとに、仮学級担任として 1 日運営を 2 日程度行う。

⑥　仮担任の実施体制

○　仮担任の時間は、担任の指導のもとに行う。

○　仮担任の時間は、必ず研究員 1 人が支援体制を整えて参与観察を行う。

⑦　スケジュール

○（実施で詳述）

⑧　その他

⑵　実施

①　対象学生　　KM（福島県教員採用試験合格）

KM は、学校ボランティアの経験はないが、学校インターンシップに関心を示したので対象とした。

②　対象校　福島市立 G 小学校　2 年生

予め教育委員会の承認を得てから、学生の希望と学校ボランティア受入れの実績を考慮して、G 小学校にお願いした。

③　スケジュール（表）

事前、実施、事後のスケジュールは、表のとおりである。

（表 10）スケジュール表

	月日	曜	活動内容	担当	備考
事前	1/23	月	学校ボランティア	学生	
	1/31	火			
	2/1	水	オリエンテーション	学生、指導担当※	学校ボ支援室
計画	2/2 ～	木	週指導計画・時案の作成	学生（指導担当）	学校
	2/16	木	学校ボランティア 学校、担任との打合せ	学生 学校（校長、教頭、 教務主任、担任） 指導担当	16：00　学校
	2/17	金	運営、指導計画の確認	学生（指導担当）	
実施	2/20	月	インターンシップ実習	学生、担任、指導担当	シミュレーション
	2/21	火			ウォーミングアップ
	2/22	水	（1 日実習）		ウォーミングアップ
	2/23	木			ステップ
	2/24	金	（1 日実習）	教職課程検討委員会	ジャンプ 10：00～12：00
事後	2/28	火	成果と課題の整理	学校（校長、教頭、教務主任、担任） 学生、指導担当	15：30　学校

※　指導担当は　大学（松下　齋藤　三浦）をさす

④　事前

KM は、学校ボランティアを活動していないので、学校や学級の子どもたちに慣れるために事前に 1 月 23 日から 7 日間学校ボランティアを活動した。

2 月 1 日には、指導担当 2 人で KM のカンファレンスを行いインターンシップへの課題意識を明確にして、次にオリエンテーションを行った。

すでに学級の子どもたちの名前も分かり、子どもの特徴も把握している様子で、取組みに意欲が見られた。担任とも打合せをしていて、国語と算数は 1 単元の運営をする予定になっていることも知らされた。

担任のシャドーイングをして担任の役割を理解し、担任の指導のもとに子どもとかかわりながら実践することを確認した。

⑤　計画

2 月 2 日から 2 月 17 日までの期間は、週指導計画と時案の作成にあてた。2 月 16 日、17 日は学校ボランティアを活動し実習に備えた。

2 月 16 日には、学校と大学とで、週計画にそって入念な打合せを行った。学校からは校長は不在で、教頭、教務主任、担任が出席し、大学からは KM、指導担当 2 人が出席した。

⑥　実施

2 月 20 日から実習が始まった。主な活動を見てみよう。

（表 11）週時間割表と実習時間（網掛け）

月日	曜	朝の活動	1	2	3	4	5	下校	備考
2/20	月	生活づくり	国語	学級会	算数	音楽	国語	15:05	
2/21	火	朝の読み聞かせ	国語	体育	生活	生活		14:15	
2/22	水	集会活動	国語	算数	図工	図工	音楽	14:40	1日実習
2/23	木	係活動	国語	算数	体育	書写	国語	15:05	職員会議
2/24	金	生活づくり	国語	算数	道徳	体育	国語	14:40	1日実習

○　1日を通した学級運営

2月24日（金）、実習最後の日の1日実習を見てみよう。

7時40分に出勤。着替えをして7時50分には教室に入って子どもたちを迎える。8時10分から、子どもの進行で朝の会が始まる。この日は1日実習なので、KMは、健康観察、授業の確認、「KM先生最後の日なので、楽しく過ごしましょう」と呼びかける。足りないところを担任が補足する。

8時15分から「生活づくり」である。この日は、担任の助言で「KM先生と楽しいことはありましたか」と呼びかけ、「隣の人と話し合ってください」と言って、子どもたちは、はじめに隣同士で、時間がたつと離れた人と席をたって思い思いに、KM先生との楽しい出来事を語り合っていた。8時25分に全体での発表になり、「ドッチボールをしてすごく速かったです」「『ニャーゴ』の授業がわかりやすくて楽しかったです」などの発表がある。8時30分、KMから「ありがとう、とってもうれしいなと思いました。1校時の準備をしてください」と指示をする。担任が、「寒いので上着を着て下さい」と指示をする。

8時35分1校時国語、「ニャーゴ」7時間目。「第4の場面です。おもしろいところありそう？みんなで音読して、おもしろいところに線を引きましょう。さあ、どうぞ。」「お隣さんと話していいよ」と、進む。全員でおもしろいところを発表し合いながら、それぞれが第4場面のおもしろさを確認していた。9時20分終了。

9時30分2校時算数、「分数」4時間目。教科書の問題を解いて、確かめる授業。10時15分終了。

10時35分3校時道徳、「手伝い」。担任が家で手伝いしているかを尋ねて話合い、価値に関心をもたせる。KMに変わり、資料を音読して、プリントを配布して、課題に取り組ませる。「あなたは手伝いますか、遊びにいきますか、その他」。書き終えたら、隣同士で話し合う。みんなで話し合う。説話をしてまとめる。11時20分終了。

11時25分4校時体育。整列をして体育館に移動。学年体育「跳び箱」。準備運動、基本の運動、跳び箱運動、発表、整理運動。12時15分終了。教室へ移動。

12時20分給食準備、給食、歯磨き、12時55分終了。

昼休み時間、子どもたちと縄跳びをして過ごす。13時35分予鈴。

13 時 40 分 5 校時国語。「ニャーゴ」8 時間目。「ようやく第五の場面になりました。9 行しかないのにおもしろいところある？」と問いかけて、「音読しましょう」で、子どもたちは、音読、線を引く。14 時全体で話し合う。「ももをかかえて」や「ニャーゴ」の鳴き声、挿絵からニャーゴが涙を流しているという話題などが出される。最後に、KM が、「物語は、たまがどう思っているのかを考えるのがおもしろいのです。紙芝居を作るときに役立ちます」と言ったところで、14 時 25 分チャイム、終了。

すぐに、帰りの会、先生の話「今朝みんなが楽しかったと言ってくれたのが、うれしかった。先生もとっても楽しかったです」と話す。14 時 40 分下校指導。

14 時 50 分から教室で、KM、担任、2 年主任（道徳主任）、指導担当の 5 人で道徳の振り返りを行う。15 時 15 分から学年主任が退席し、4 人で振り返る。KM から、1 日実習の 2 日間は、授業のことしか考えられなかったという感想があった。

16 時 30 分　教頭先生、職員室の先生方にあいさつをして退室する。

KM は、担任の指導のもとに、1 日学級運営をスムーズに行うことができた。

○　単元を通した授業づくり

国語「ニャーゴ」8 時間、算数「分数」4 時間、単元を通した授業を実施できた。

国語では、はじめ場面分けに時間がかかりそうだったので、その日の反省会で「場面ごとにおもしろいところを見つけよう」とめあてを持たせてと取り組ませることにした。小単元の場面ごとに読み取ることは、予定通り 8 時間で終えることができた。

ここから、国語の授業の単元の進め方、1 時間の授業の進め方の基本が理解されているかが不安になった。

算数でも、そのことが言えそうだ。

○　学級づくり

2 年生の学級は、子ども同士の親和性が高く、担任とも強い信頼関係で結ばれていて落ち着いた学級である。これははじめからあるのではなく、担任が日々のかかわりの中で作りあげてきたことを KM には機会あるごとに伝え、その秘訣を見つけるように話した。

今回スムーズに授業運営、学級運営ができたのは、子どもたちの力がある。自由に発言し聴き合う習慣がついていたことが大きい。

その一つに、学校全体で取り組んでいる朝の 25 分の活動の時間があげられる。「生活づくり、読書タイム、集会活動、係活動」で構成されているが、その中で「生活づくり」は、子ども同士がその日の話題を多くの友だちと交流し合っているのは、友だち同士を理解し合い、つなぎ合う大きな要因になっているように思えた。

それではすべての学級がこの学級のようかというと、異なっている。それは、担任の人柄と指導にありそうだ。大らかで包み込む豊かさと指導力が子どもたちに安心感を持たせるのだろう。

学級は、担任と子どもたちといっしょにつくるということに少しでも気付いてほしい。

３　評価

2 月 28 日（火）に、実施校で事後の話し合いを持った。出席者は、校長、教頭、教務主任、担任、KM、松下、齋藤、二瓶の 9 人である。事後にアンケートをとっている。

学生と学校とに分けて、昨年度のアンケートと重ねてあわせて、学校インターンシップを整理してみよう。

⑴　学生

今回実施した KM、昨年度実施し今年度新採用教員の AS、BS の声をアンケートから聞いてみよう。

①　効果

KM は、「大変役立った」とし、「4 月からの自信におおいにつながる」と言う。「残りの大学生活でやるべきことを見いだし、やる気も引き出された」「教育実習とは違った現職の先生方と話したこと、姿から学ばせていただいたことも大きい」と、学校の素顔にふれて親近感と安心感を持ち、自信と期待になったようだ。

AS も BS も「大変役立った」とし、AS は「教師として担任として 1 日過ごした体験と 1 日に授業を 5 つも行う大変さ」をあげ、BS は「先生の過ごし方が分かったこと、指示と発問のスキルアップに気付いたこと」をあげている。

②　教育実習とのちがい

KM は、教育実習との違いを意識しているので、その点をみてみよう。

KM は、「単発で授業すること、毎日 3 ～5 時間授業することは、考えることが全く違う。子ども理解合わせた授業進度や的確な指示発問(指導言を考えている余裕はない)」と書く。

AS は、「教育実習は、教師の良さみたいなものを学べ、インターンシップは教師の大変さや厳しさを学んだ。この生活が 4 月から始まる、あなたはどうしていく？と考える機会になった」と書く。

BS は、「学力や特別支援の観点から見て様々な子がいるところ。実習は『教員っていいな』と思うものだったが、インターンは『教員ってたいへんだな』と、少し 4 月に向けて現実味があるところ」と書く。

○　様々な子どもがいるところ、普段の先生の姿に触れられたこと
○　授業を毎日毎時間やること、的確な指示発問をすること
○　教育実習は教員にあこがれたが、インターでは大変だと現実的になる
○　4 月から始まる覚悟のようなもの

インターンシップは、学校現場の教員の仕事を身近に感じ取ることができて、自己課題にも気付く機会になっているようだ。

新採用になっての評価が気になる。教員になって役立っているのだろうか。

ASは、今でも「大変役立った」と言い、「1日を過ごしたこと、1日授業をやったこと、1日の流れがわかったこと、かなり現実に近い」と言う。BSも「大変役立った」と言い「教師の多忙さを知ったこと、1日を通すのは大事だ」と言う。

③　学校ボランティアとのちがい

学校ボランティアとの違いも整理しておきたい。

KMは、「1週間フルに授業者として子どもとかかわるので、自然と子どもとの関係が構築される」と、子どもとの関係性を指摘する。

ASは、「担任として過ごすこと、授業を行うこと、この2つを通して20数名の児童と向き合うこと。1つ1つが子どもの重要な時間であり、それに見合ったものだったのかということを毎日考えさせられ痛感した」と言う。BS も「学級担任という責任の重さ」と言う。

新採用になってからは、SAは「学校ボランティアはボランティアだな。先生じゃない。責任がない」と言う。

ボランティアとインターンシップの違いは、「学級担任の責任の重さ」を体験することにあるようだ。BSは、「自分の発した言葉で子どもは動くので、子どもの様子はすべて自分にかえってくると思った」と言う。

④　「学び」

インターンシップで何を学んだか。「実践力評価基準」の4項目で見てみよう。

○　子ども理解

KM：これから積極的に関わっていくことが必要

AS:　表出された言動から子どもの思いを理解することができなかった。

BS:　担任になると全員の子どもを見るのが難しいと思った。手のかかる子、発言する子に目が行ってしまう。大人しい子とも遊んだり話したりして子ども理解に努めた。

いろいろな子どもがいることが分かったことや、子ども理解は短い時間でわかるものではないことが分かったこと、気になる子に目が行きがちなので大人しい子にも声をかけることを心がけたことは大きな収穫だ。

○　授業づくり

KM：子ども・教材・教師の動線を描く。

AS:　教科ごとの特性と児童の実態と掛け合わせることができなかった。授業の一連の流れ、ポイント、指示どれも浅はかな思考に留まった。

BS:　週案を書くことで単元の中での1時間として授業を考えることができた。流れが決まったからと言って、子どもが生き生きと授業に参加してくれるわけではなく、ゴールに向かってどんな指示を出せば良いのか悩んだ。

併せて、「週案や時案」についても尋ねた。

KM:必ずしも想定通りに授業が進むわけではないので、その都度時案を再検討する大変さはあった。

AS:　大変さよりは難しさ。今まで 1 授業で考えていたことが薄すぎて、精進しなければと思った。

BS:　単元の流れの中の 1 時間で授業を考えたことがなかったため、一人でこんなに多くの時案を短時間で作ったことがないため、大変だった。

授業の難しさを実感し、授業をつくるポイントに気付くことができたようだ。大学の授業づくりの課題も見えてきた。

○　学級づくり

KM：4・5 月で規律等をしっかり。やさしさと厳しさ。

AS:　子どもたちが過ごす日々を、学級として何を目標にし、どうすべきかを考えられなかった。4 月からは子どもたちと考えていきたい。

BS:　授業が学級をつくると思った。子どもが、授業が楽しい、友だちと協力すれば解けるという感覚を持てば支持的風土が広がっていくと感じた。

KM は、4 月に見すえて学級づくりの戦略ができたようだ。

○　学校・地域づくり

KM:G 小の子どもを把握できなかった（登下校時）

AS: 色々なことが起きる中で、それぞれを学びへつなげ、子どもの成長を認めてあげること。教師の役割は多く、深いものだと感じた。

BS: 学校の中で先生方が協力する様子を見た。先生方がお互いに協力することが『学び合い』を大切にする学校づくりにつながる気がした。

校外の子どもの様子を知ること、教師の役割を自覚すること、教師同士のつながりを知るところから、学校・地域づくり気付き始めるようになるのだろう。

○　教育観

これまでのことを踏まえて、教育観について尋ねた。

KM:ほめてあげる大切さ

AS: これが教育だ！というところまでは深められていない。1 授業、1 日、1 年をとして子どもがいい方向へ変化、成長していくための導かなと思っている。

BS: 自分がどんな教育観を持てばよいのかまだわからないが、子どもが楽しいと思えるような授業をしたいと思った。授業を通して学んでいけたら、子どもの成長につながると思う。

インターンシップを通して、ほめて、楽しい授業を通して子どもの成長を支えていきたいという願いを持ち、そんな教師になりたいと改めて願うようになったのではないだろうか。

⑵学校

今年と昨年の、2 校の教員の評価を見てみよう。

① 効果

校長は、2 人とも「4 月からの不安がわずかでも解消され、自分の課題が見つけられたのではないか」と言い、「実習とは異なり、自分で考え運営、授業実践し、改善等もらえることで、自分のものとなる。それが即実践だ」と評価する。

また、「学級の子どもたちは、若い意欲のある先生に接し、生き生きと楽しい生活を送り将来へのあこがれを持つことができたと思う」と、子どもへの効果も認めている。

学級担任は、「児童にとって、身近な人以外とかかわるよい学びの場になった」と、まず子どもへの効果を認めている。次に、「インターンシップ期間は、担任が 2 人存在するような状態である。そのため、担任も普段より児童に目が届き、より細やかな対応や指導ができた」と、担任にも役立ったと積極的な評価をしている。

もう一人の担任も「担任している児童を普段とは違った角度から見ることにより捉え直しができた」と、同じように書いている。

② 負担

学級担任は、「学生の真摯で意欲的な姿勢に、自分も大いに刺激を受けた。自己の学習指導や学級経営を振り返り、反省・改善しながら過ごした」と書いている。自分の学び直しの機会としてとらえていて、負担とは意識していないように思われる。

2 校の他の先生方からも、特に負担はなかった、という声が聞かれた。

その理由として、１つが、学校ボランティアでしっかりと学校と信頼関係が作られていることがある。

「学生にボランティアにも来ていただいて、取り組む態度や姿勢から、先生方に応援しようという気運が高まっていた。ボランティアの経験からインターンシップと言う流れが良い」と。また、「ボランティア経験者（長期）によるインターンシップが前提である」と書いている。

２つは、事前の打合せを綿密に行っていることである。

校長は「事前の打合せがしっかりしており、特に負担は感じなかった」と書き、学級担任も「インターンシップ前の 1 週間、ボランティアとして児童に慣れ親しみ、インターンシップの期間の教科指導の内容について相談することができた。そのため、担任もインターンシップ期間までに見通しをもって準備することができた」と書いている。

学校も学生にも、時間と心の準備ができていると、インターンシップを相互に活かそうというウィンウィンの関係性が築けることができそうだ。

４　運営

⑴　時期

今年は、2 月 20 日から、昨年は、学校の都合もあり 3 月 7 日から 5 日間行った。

昨年は、年度末は避けてほしいという声があった。学生からも、引っ越しの準備もありあまり適切ではなかったようだ。

2 月は、学校の学習もまとめの時期になり学習指導に大きな影響もなく、学生も卒論が終わり 4 月の準備に入る時期で適切のようだ。

⑵　期間

今年も昨年も 5 日間だった。昨年は 2 人で同じ学級で行ったこともあり、反省の中に 10 日程度と言う意見もあったが、概ね 5 日程度が適切だという意見が多かった。

⑶　実習日数

今年は、1 日自習が 2 日、他に単元を通した実習を行っている。昨年は 2 人で 5 日間だったので、1 人 1.5 日の実習だったが、学生から 1 日実習を 2 日やりリベンジしたかったという意見があった。今年は、2 日で学校も学生も適当としている。

５　整理

昨年、今年と 2 年、担任の指導のもとに、仮担任として 1 日実習を活動する学校インターンシップを行った。学生には、4 月に教員になる直前の体験実習で、1 日の流れが分かり、授業づくりや学級づくりの課題も見え、心構えもできて効果があることが分かった。

実習プログラムの策定や実施学生の範囲や指導体制、実施校の確保等課題が多いことも分かった。今後の検討課題としたい。

Ⅴ　まとめ

本調査において、新採用教員は最初の 4 か月に戸惑っていることや、夏休みあけから慣れてきて落ち着いてくること、2 年目教員は学校の流れも分かり、自信をもって生き生きと実践していることなどが分かった。

大学において学校ボランティア、学校インターンシップをした新採用教員も、同じように戸惑っていることが分かった。

学校ボランティアでの「学び」は、学校のニーズに応える必要もあり、気になる子どもへの支援など、個別的で断片的な活動になりがちである。また、活動してもそこで留まり、出来事と活動との関係性が結びつかないために、子どもを動かす技に気付かないまま活動していることが考えられる。そこで、学校教育支援実習では、単位取得要件にカンファレンスを 2 時間以上、課すこととした。

カンファレンスについては、学校ボランティア支援員との個別のカンファレンスだけでなく、学生同士の対話によるカンファレンスを取り入れた。ここでは、自分の活動を整理し振り返ることはもちろんだが、他の学生と応答することで多様な視点から振り返ることができ、一人で思い込んでいた考えが広がり、他の方策を考える手がかりを得られることが分かった。また、参加者は 1 人だったが、専門の講師を招いて合同カンファレンスを行った。専門的知見を得ることによって、学生が一人で思い込んでいた事柄に対する見方が深まることも分かった。これからは、技術的熟達と省察的実践が求められる。合同カンファレンスをとおして、その向上が期待される。

しかし、教員として 4 月からスタートするのに学校教育支援実習だけでは不安がある。学級担任は、学級全体を掌握する力が必要だからである。

学校インターンシップにおいては、1 名の学生の実施に留まったが、学級担任の指導を受けながら仮担任として 1 日実習を行い、学級運営を体験することによって、4 月からのある程度の「自信」を獲得した。しかし実際に学級運営ができるようになるためには、やはり、実践と省察の往還が必要である。

本学研究科では、昨年から「教育実践福島ラウンドテーブル」を開催し、県内外の教員の参加を得て、「学び続ける教師コミュニティ」を実施している。大学卒業後も、大学とつながり学び続ける教員を育てたいと考えている。

また、調査した岡山県では、岡山大学、岡山県教育委員会、岡山市教育委員会とで連携協働して、教員養成・採用・研修の一体化を、それぞれの職域ののりしろを広く重ねて図っている。先進県に学びながら、実践的指導力向上の道筋を探究する必要もある。

大学の教育課程と現場との接続をどのように図っていくかについて、さらに検討を重ねたい。

（齋藤幸男）

おわりに

平成 27 年度に「学校インターンシップ」（試行）事業を始めて、今年度で 2 年目を終えた。福島県教育委員会をはじめ、実施校を引き受けていただいた、伊達市教育委員会、福島市教育委員会には、特段のご配慮をいただいた。厚く御礼申し上げる。また、実施校となった 2 つの小学校の校長先生をはじめ、受け入れ学級の各先生方に御礼申し上げる。

福島大学人間発達文化学類における学校インターンシップ事業は、教員の即戦力養成として期待される教員養成を主課題とする福島大学の現場で培われてきた実践的な見通しによって成り立っている。

平成 24 年度から学類として本格的な実施となった「学校ボランティア」による学生の成長と私たち指導者の指導のあり方、教育委員会・学校との連携・協働のあり方など、教員としての即戦力養成に欠かせない連携のピースが少しずつ整い始めたことによって、実施の方向性が見えてきた。その間、「実践力評価基準」の必要性を理解した私たちは、試案づくりにも取り組んだ。

こうした中で、「学校ボランティア」が、即戦力育成にとって「学校や学級を経験する」機会として大きな役割を果たしているとの認識に立ちつつも、その省察の中からその限界を発見し、「学校ボランティア」を「学校教育支援実習」として単位化した。同時に、私たちは、より即戦力形成に必要な教師としての「責任」を自覚する場の提供＝「仮担任」としてのインターンシップの必要性を自覚するようになった。

本報告では平成 28 年度の取り組みを紹介してきたが、この取り組みも平成 24 年度から始まった福島大学人間発達文化学類の即戦力育成の取り組みの一環であることをご理解いただきたいと思う。

私たちは、学校インターンシップの取り組みは緒に就いたばかりで、課題が山積していることを自覚している。次年度からは、教職大学院が開設されるので、学類と教職大学院との連携協力も視野に入れながら、学生の即戦力育成の取り組みを一層充実させていきたいと考えている。

本取り組みについてご意見をお寄せいただければ幸いである。

（松下行則）

資料１　ASアンケート整理

回答　平成28年9月・平成29年1月

AS			
回答月	9月	1月	備考
教師の仕事	何をするにしても子どもを念頭に考えること。 「あの子を…」「あの子のために…」を常に考え、変化をあたえること。	○　とてもやりがいがある 毎日充実していると感じるため。ただやりがいだけで細かな配慮が欠けてしまっている部分もある。「楽しいな、頑張ろう」という前向きな気持ちだけでなく、「これでいいのかな」と、一歩引く気持ちも大切だと感じている。	
うれしいこと	子どもの作文や会話、保護者からのお話やコメントなどから、「先生が良かった」「先生が好き」といった類の話をきくこと。「今日の授業の○○が面白かった」というのも嬉しいです。	毎日の児童のノートへのコメント 先生になってから、子どもが楽しそうですと保護者に言われたこと。一緒に遊ぶこと。	認められる
大変なこと	特にこれ、といったものはないが、保護者対応、児童対応、相談できる人の有無、学級経営	保護者対応。1日の流し方。 子どもへの指導の仕方	
先生方との関係	○　まあまあうまくいっている。 特に忙しそうにしているときは、聞いたら迷惑かなと思うことがあります。	○　まあまあうまくいっている 同学年をはじめ、どの先生も優しく接してくださり、気にかけて下さっているので良好だと感じる。しかし、管理職・教務主任の対応に如何なものかと感じることが多々ある。	
保護者との関係	○　まあまあうまくいっている 熱心な方が多く、子どもの様子から考えてくれる方がほとんどです。新任ということもあり、応援してくれる人が多く、頑張ろう！と思えています。	○　まあまあうまくいっている 怒られたりすることはあったが、事情を話せば分かってくれたり、お願いすれば快く了承してくださる保護者の方ばかりである。一番強く感じたのは、保護者の子どもに対する愛情や想いをいかにして教師側に伝えたりくみ取ったりするかであると感じた。	
地域はどんなところですか	○　住みやすい 知っている場所が多いので、とても住みやすい。	○　住みやすい のどかで住みやすい地域であると思う。自然豊かでお祭りなどに対しても力を入れているので、子どもたちにとってもいい環境であると思う。	
教師の仕事をどうのように	（大学のとき） すごいやりがいがある 授業づくり	（大学のとき） 子どもと毎日接することができて楽しい。	

思っていたか	子どもと楽しく過ごす （現在） 授業以外の仕事がかなりある やりがいがある 子どもとかかわるのは楽しい 授業を作る時間があまりとれていない	（現在） 子どもと接するだけでなく、事務作業や評価といった幅広い仕事内容である。	
子どもに伝えたいこと		①勉強は楽しく心を豊かにする。 ②自分自身や自分に関わる人を大切にする。 ③夢や目標を持つ大切さ	
即戦力とは	自分なりのビジョンを持っている人（何に関しても）。意欲のある人。常に変化を求める人。迅速に対応できる人。コミュニケーション力。総合的な人間力がある人だと思います。	子どもを見る目とコミュニケーション力だと思う。若いだけで子どもたちはついてくるが、その中で子ども同士の関係や一人一人の性格・考え方を見取れるかで対応が変わってくると思う。また、悩んだ時に周りの先生に聞けるコミュニケーション力が大切になる	
学校ボランティア・学校インターンシップ	（インタビューから） 学校ボランティアは、ボランティアだな。先生じゃない。責任がない。課題や問題がなかった。あれば、もっと深められたかもしれない。 学校インターンシップは、大変役立った、子どもたちと１日を過ごしたことと､1日を通して授業をやったこと、1 日の流れを体感できた。実際授業をやってみると思うようにいかない、うまくいかない。かなり現実に近い。今の学校は、週案はない。	（大変役立った） 様々な子どもたちと関わることで「こんな子もいるんだなあ」と思えたことで、現場に出た時に戸惑ったりしなかったことです。耐性というと言葉が変ですが、心の準備ができていたのだと思います。 （もっとやっておけばよかったこと） たくさんの先生の授業を見ること、様々な取り組み（宿題、係、当番など）自分の中の引き出しを増やしておけるとよかったかなと思います。	心の準備
大学の「学び」 やっておいていよかったこと･役立ったこと	1．子ども理解　2．授業づくり 〇教育実習 実際に関わる経験が大きかった。頭ではわかっていたが、実際はということもあり、一番の収穫だった。授業づくりに関しても実際にやってみることが大きいと感じた。 3．学級づくり　4．学校・地域づくり 〇特になし 5．教育の意義や目的 〇ほとんどの授業 理論や根本的な概念の授業が大きかった気がす	1．子ども理解 〇教育実習等 まずは、たくさんの子どもと関わることが大切だと思う。 2．授業づくり　3．学級づくり　4．学校・地域づくり 〇特になし 5．教育の意義や目的 〇各教科指導論 教育の目的や教科の意義などが学べた。	教育実習 教科指導論

	る。指導要領関係は役立つ。		
大学の「学び」 やっておけばよかったこと	1．子ども理解 〇子ども理解の基本的な理解、実際をとおしての理解 ほとんどそういった授業がなかった。子ども理解とは何なのか。実践を通して分かること、気付くこともとても大きいと思う。 2．授業づくり 〇各教科のポイント 授業の作り方は、一番やってほしい。でないと教師になったものの、どうしていいのか分からない。基礎がないところに経験を積んでも良いものにはならない。 3．学級づくり 〇基本的な理解 学生時代、学級づくりの難しさを分かっていなかった。どんなんことが求められており、何をしていけばいいのか基本的なことを学びたかった。 4．学校・地域づくり　5．教育の意義や目的 〇特になし	1．子ども理解 〇発達障がある子・児童への関わり ここに悩む先生は多いと思う。対処法や基本的なことを知っているだけで、その子やその周りの子にとっても良いと思う。 2．授業づくり 〇単元の構成 教育実習などでは、単元ではなく 1 授業の構成しか考えないから。単元を通して何をしていくかを学ぶ必要がある。 3．学級づくり 〇宿題、係、当番決めなど最初の 1 か月の過ごし方 1 か月ですべきことがたくさんあったと思う。そこが子どもたちにとっての判断基準にもなると思う。そこで何をすべきか実践的な学びが足りなかった。 4．学校・地域づくり　5．教育の意義や目的 〇特になし	発達障がい 単元 学級づくり
大学への要望等	全体的に歴史であったり、概要であったりと今思うと意味があったのかと感じるものばかりでした。学生時代は、模擬授業とかは嫌だと感じていました。しかし、それは各教科の授業の作り方、勉強に気付いていなかったからだと思います。自信をもって教師の世界に飛び込むには、もっと実践的な授業があると力がつくと思います。各先生方にも負担だとは思いますが、是非やってほしいです。	3・4 年生にはもっと実践的な授業があるといい。まずはやってみて、そこからどうするかだと思う。でないと、教育の意義などを自分のレベルに落とし込めないからだ。意義などを学ぶことは大切だが、この授業のこの指導に意義を落とし込めなければ、学んで終わりになってしまうからだと思う。色々事情はあると思いますが、よろしくお願いいたします。	実践的な学びと理論の往還

※ 1 月の調査は 9 月の質問に追加して行い、9 月には空欄がある。

資料２　教職２年目教員ンアンケート整理

回答　平成 29 年 1 月

	UR	NA	備考
所属校	福島県 M 小学校	宮城県 A 小学校	
担　任	6 年生	6 年生	
総　括	自分が成長しているかどうかはあまり実感がわきませんが、子どもたちは絶対に成長していると思います。 自分が即戦力だったかは定かではありませんが、まわりの先生方に助けられ、子どもたちに助けられ、保護者の方々に助けられがんばってきたなぁ～とアンケートを書きながら思いました。 卒業式まで残り５２日となりました。最高の卒業式を迎えられるように一日一日を大切に過ごして行きたいと思います	学生時代に学校ボランティアを行う機会を与えてくださったことに,心から感謝しています。同期は講師経験者も多く，現場でも実践力が求められますが，そんな中でも新卒新任でここまでやって来られたのは，間違いなく学校ボランティアの経験があったからです。学生時代に学校ボランティアや教育実習で出会った先生のおかげで，今の私があると思っています。現在教員を志す皆さんにも，ぜひ学校ボランティアで実践力を磨き，自信を付けてほしいと思います。	
教師の仕事	（やりがいがある） 子どもたちとのかかわりの中で、トラブルなどがあってもそれは成長の中で必要なこともあり、子どもたちの成長を実感できる。 授業づくりの工夫など、毎日たくさん学ぶことがあるのも面白いと感じている。	（やりがいがあるが大変だ） 昨年は，教職１年目で何も分からず，ベテランの先生と同じ仕事を求められることに苦痛を感じていましたが，２年目の今年は，仕事の流れも分かり，自分のやりたいことが少しずつできるようになってきました。だからこそ，仕事量が増えた今年の方が，昨年より生き生きと働くことができているように感じています。	
うれしいこと	子どもの成長が感じられたこと。(まわりの先生方からも認められたとき。) 研究授業で褒められたこと。 子どもたちが慕ってくれること。 子どもたちだけでできることが増えてきたこと。(プチ『学び合い』のようなものがうまくいったこと)	・児童の成長が実感できること ・児童が生き生きと学んでいる姿を見ること ・自分の思いが児童や保護者に伝わったとき ・担当している行事がうまくいったとき ・上司に「授業がうまくなった」と言われたとき	認められる 達成した時 慕われる
困ったこと、大変なこと	外国語活動についての研修で、英語が分からなかったこと。(勉強したいが、勉強する時間がないこと。) 授業準備に時間をかけると一日があっという間に終わってしまうこと。	・小規模校のため，校務分掌が多く授業の準備や学級のことに使える時間が少ないこと ・小規模校のため，学年のことを全て自分でやらなければならないこと ・就学支援，特別支援など	
先生方との関係	○　まあまあうまくいっている 分からないことがあれ	○　少し苦手な先生がいる 苦手な先生もいますが、それも含め、相談できる先生がいま	

	ば、すぐに先生方誰でも質問することができる。また、周りの先生方もパソコンの操作など分からないことは私に質問してくれる。職員室では楽しい雑談もできるので、良い関係だと思う。	す。ほとんどの先生が温かく見守ってくださり、相談に乗ってくれます。人間関係でいえば、とてもよい職場だと思います。	
保護者との関係	○　まあまあうまくいっている 　電話や連絡帳での連絡は適宜行うようにしている。行事後の懇親会等は皆勤賞（笑）なので、そこでの関係づくりもまあまあうまくいっていると思う。(担任しているクラスの保護者だけでなく、他のクラスの保護者とも話す機会が増えてきたと思う。)	○　クレーマーがいる 　うまくいかないご家庭もありますが、ほとんどの保護者の方が温かく接してくださいます。昨年クレーマーだった保護者のお子さんを今年担任することになり不安でしたが、よい信頼関係を築くことができ、今では心強い味方です。誠意をもって接することの大切さを実感しています。	誠実 信頼関係
地域はどんなところか	○　少し住みにくい、まあまあ関心がある 　雪がひどくならなければ、住みやすさはまあまあ。新幹線に乗りたいときは少し不便。近所に住んでいる方に会えば、挨拶は欠かさずにしている。	○　住みにくい、まあまあ関心がある 　交通の便が悪く、住むにはとても不便です。しかし、自然豊かで地域全体で児童を育てていこうとする温かな風土があります。地区民運動会を初め、地域人材を活用した民話を聞く会、伝統芸能の継承など、様々な取り組みがあり、学校と地域が密接に関わっているのは、この地域ならではだと思います。また、中学校区での幼少中連携事業を継続して行っており、子どもの12 年間の成長を支援する基盤が整っていると感じます。	
教師の仕事をどのように思っていたか	（大学のとき） 楽しい。大変。 （現在） 楽しさのためには準備が必要。 楽しさのあとには振り返りが必要。 大変なのは、仕方がないかなぁ…。	（大学のとき） 子どもの成長を近くで見ることのできる，すばらしい仕事。一人一人に寄り添うことのできる教師になりたい。児童に分かりやすい授業をして，達成感を味わわせたいし，味わいたい。 （現在） 学級以外の仕事が多すぎて，一人一人に寄り添う時間が取れないことにジレンマを感じる。そんな中でも，児童と一緒に考え，うまく行ったとき，喜びとやりがいを感じる。	あこがれ 仕事が多い
子どもたちに伝えたいこと	勉強は楽しい！ということ。 これから何にでもなる可能性をひとりひとり持っている！ということ。 友達や家族がいれば何とかなる！ということ。	・多様な考えを認め，受け入れられる人になってほしい ・自分で考え，行動できる人になってほしい ・困ったときに助けを求めたり，困っている人に手を差し伸べたりできる人になってほしい。	
即戦力と	まわりの先生方の仕事を真	教壇に立った時，新任であって	

は	似してでも同じように行動すること。	も一定水準の指導力が求められる,それが即戦力だと思います。即戦力を身に付けるためには,（附属だけでなく）様々な学校・先生の授業を見ることが最も大切だと思います。	
今大切にして取り組んでいること	卒業に向けての指導、中学校を意識させ、小学校での成長を実感させる。	相手の気持ちを考えることを様々な場面で指導しています。自分と友達、考えが違って当たり前。その違いを肯定的に受けとめ、自身の価値観を広げたり、思考を深めたりできるようになってほしいと願っています。	
教師になって上達したこと	指導案の作成。（２年間で研究授業を１１回行った。） 休日に勉強会に参加するようになって、校外のつながりができた。	自分の中で少し余裕ができて，沈黙を恐れず，児童が考える時間を確保できるようになったと思います。また，諸先輩の姿を見て，自分の中で「これだけは絶対」という指導の芯が太くなってきたと感じています。そのため，初任時より指導に一貫性が出てきたと思います。	
学校ボランティア	（大変役立った） 校外学習・宿泊学習での教師の動きが学べたこと。教育実習ではできない経験だったため。 様々な学年・教科の授業の実際の姿を見ることができたこと。教育実習は限られた学年の授業しか参観できなかったが、幅広く学べた。また、実際に授業をさせていただけた。 （やっておけばよかったこと） 学校ボランティアをしている学生同士の交流。ほとんど一人での活動だったので、他の学生はどのような活動をして、どのようなことを学んでいたのか聞いておけば自分の学びももっと深まっていたかもしれないと思う。	（大変役立った） 急に学年担任を任せられ，何も分からず，困ったときに浮かんだのが，学校ボランティアで配属された学級の授業風景です。学校ボランティアでお世話になった先生の指導をモデルにして授業を展開することができ,「やっていてよかった」と強く感じたのを覚えています。 （やっておけばよかったこと） 授業だけでなく，朝の会や給食，清掃の場面なども見ることができればよかったと思います。	学生同士の交流 朝の会 給食指導 清掃指導
大学の「学び」 やってよかった	（よかったこと） 2．授業づくり ○各教科の指導論 授業づくりの基本は学習指導要領をしっかり理解しておくことが欠かせないと思うので。 1．3．4．5．は空欄	（よかったこと） 1．子ども理解 ○特別支援教育関係 ・大学の講義 ・発達障がい児と関わるボランティア ・学校ボランティア 通常学級においても、特別な支援を必要とする児童は必ずいます。そういった児童と接する際に、障がいに関する知識や障がい児と接した経験が役立っています。	特別支援 発達障がい 教育実習

		2．授業づくり ○教育実習 ○各教科の指導論の講義 ○学校ボランティア 教師になったときに役立ったのは，実際の教材について学んだり，指導の現場を見たりした経験です。より具体的・実践的な学びが，現場で活きる力になると思います。 3．学級づくり　4．学校・地域づくり ○教育実習 ○　学校ボランティア 学級づくりにおいても、やはり学生時代の実践的な学びが役立っていると思います。 5．教育の意義や目的 ○大学の講義 ○教員採用試験の勉強 講義でも一通り学んだことですが、教採を受けるにあたり、自分で学習し直したことで理解が深まったと思います。	
大学の「学び」 やっておけばよかった	空欄	全項目 ○学校ボランティアなど、実際の教育現場と関わる活動 もっとたくさんの学校に行って、色々な学校、先生の指導方法や教育理念、教育風土に触れることができればよかったと思います。(私が在学中に関わった学校は附属を含め6校でした。)	多くの学校体験
大学への要望等	大学での研究と現場の授業などがもっとつながればいいなぁと思う。新しい学習についての方針が国から出されても（英語や道徳など)、否定的にとらえる先生方が多いので、距離がもっと近くなればそこをうまくフォローできるのでは…と思う。	（再掲）学生時代に学校ボランティアを行う機会を与えてくださったことに，心から感謝しています。同期は講師経験者も多く，現場でも実践力が求められますが，そんな中でも新卒新任でここまでやって来られたのは，間違いなく学校ボランティアの経験があったからです。学生時代に学校ボランティアや教育実習で出会った先生のおかげで，今の私があると思っています。現在教員を志す皆さんにも，ぜひ学校ボランティアで実践力を磨き，自信を付けてほしいと思います。	大学と学校現場が近づく

（資料3） 授業づくり自己診断整理

		新採用（1年目）			2年目		
		AS		UR			NA
No.	項　　目	H28.9	H28.12	H27.9	H28.9	H29.1	H29.1
1	授業に参加しない児童への指導が難しい ・学習意欲のない児童 ・集中できない児童 ・立ち歩いてしまう児童 ・他の児童に迷惑をかけてしまう児童等	2	2	4	3	2	4
2	進度・学力差への対応が難しい ・進度の速い児童と遅い児童の差 ・課題がはやく終わった児童への対応 ・学習が遅れてしまう児童への対応	3	2	4	2	2	3
3	教材研究が十分にできない ・時間がとれない ・どのようにすればよいか分からない	2	2		3	3	4
4	発問の仕方が難しい ・児童の考えを引き出す発問 ・児童の思考を深めたり広げたりする発問 ・端的に分かりやすい発問 ・ねらいに合った発問	4	3		4	3	3
5	授業のルールを決めたり守らせたりすることができない ・話し方や聞き方のルール ・時間の守らせ方	2	2	4	3	3	2
6	いつも同じ児童ばかりが発言する ・挙手する児童が決まってしまっている ・授業中なかなか手が挙げられない児童がいる	2	2		2	2	2
7	板書の仕方が難しい ・ポイントをまとめて書くのが難しい ・書くのに時間がかかってしまう ・板書計画が十分できていない	2	3		3	2	2
8	児童の意見のいかし方、まとめ方が難しい ・教師の意図する方向とのズレがある ・多様な意見をまとめきれない ・想定外の意見に戸惑う ・つぶやきをうまく拾えない ・児童の意見がつながらない	3	3		4	2	2
9	児童が興味・関心を持てる授業にならない ・児童を引き付けられない ・導入の仕方が難しい ・学習に興味・関心を持たせることができない	3	3		2	2	3
10	ノートの書かせ方が難しい ・ノートに何をどのように書かせるか ・ノートにどのくらいの分量を書かせるか	3	3		3	2	2
11	学力を高めるのが難しい ・単元テストの平均点が上がらない ・学力テストの平均点が上がらない	2	2	4	4	3	4
12	その他（自由記述）						

（資料４） 実践力評価評価表

福島の未来を創造する能動的な教師としての基礎的実践力評価基準（試案）

（基本的な考え方）

1　子ども理解が、全ての教育活動の基盤となる。

2　縦軸に学年段階による実践力の深まりを、横軸に「学び」のひろがりを表にした。すべてがこのように段階をふむのではなく、モデル例として示した。

学年	段　階	項　　目	項目内容	評価基準			
				発　　見	省　　察	創　　造	評点
2年	参　観	子ども理解	子どもに興味関心を持つ	子どもと話ができる	子どもの中に入り、行動を記録できる	子どもと共に活動できる	１２３４５
	興味 関心	授業づくり	授業に関心を持つ	子どもの発言や考えに関心をもつ	子どもの発言や活動を記録できる	子どもの「学び」を整理できる	１２３４５
		学級づくり	学級の雰囲気が分かる	学級の雰囲気に気付く	子ども同士の関係を記録できる	子ども同士の関係を整理できる	１２３４５
		学校・地域づくり	教師の仕事に関心を持つ	教師の仕事に気付く	仕事を分担して行うことができる	教師の仕事を整理できる	１２３４５
			学級と保護者の関係に関心を持つ	学級と保護者の関係に気付く	授業参観等に参加できる	授業参観等に参加し感想を持つことができる	
3年	参　加	子ども理解	子どもの特性や発達を理解できる	子どもの言動に関心をもつ	子どもの言動を記録できる	子どもの言動を整理できる	１２３４５
	問題意識	授業づくり	子どもの「学び」と授業の展開を理解できる	子どものつまずきに気付く	子どものつまずきを記録できる	子どもの「学び」と授業の展開を整理できる	１２３４５
		学級づくり	学級での役割や集団の在り方を理解できる	子どもたちの活動の様子に気付く	子どもたちの活動の様子を記録できる	子どもたちの活動を整理できる	１２３４５
		学校・地域づくり	教師間の協力関係に関心を持つ	教師間の協力関係に気付く	学校の仕事を分担して行うことができる	教師間の協力関係を整理できる	１２３４５
			学校と地域の関係に関心を持つ	学校と地域の関係に気付く	学校行事等に参加できる	学校行事等に参加して感想を持つことができる	
4年	参　画	子ども理解	子どもを共感的に理解できる	子どもの言動の背景に気付く	子どもの言動の背景や要因を把握できる	子どもの言動に寄り添い支援できる	１２３４５
	課題意識	授業づくり	子どもの「学び」と授業の展開を探究できる	子ども同士の「学び」の関係に気付く	子ども同士の「学び」の関係を記録できる	子ども同士の「学び」と授業の展開を整理できる	１２３４５
		学級づくり	子どもたちの集団と教師の関係性を整理できる	子どもたちの集団に気付く	子どもたちの集団の関係を記録できる	子どもたちの集団と教師の関係を整理できる	１２３４５
		学校・地域づくり	学校を組織として理解できる	教師の役割に気付く	教師の役割を記録できる	教師の役割と責任を整理できる	１２３４５
			学校と地域連携について整理できる	地域教材や地域人材の活用に気付く	地域探検や地域交流授業に参加できる	学校と地域連携について整理できる	
院生	参　画 実　践	子ども理解	子どもの成長の様相を理解できる	子どもの資質・能力の可能性に気付く	子ども一人ひとりの様相を整理できる	どの子にも寄り添うことができる	１２３４５
	課題追究	授業づくり	「学び」のある授業を計画実践できる	「学び」のある授業を計画構想できる	「学び」のある授業を実践し、検討できる	どの子にも「学び」のある授業を計画構想できる	１２３４５
		学級づくり	親和性のある機能する学級集団づくりを計画できる	学級集団としてのまとまりや機能に気付く	子どもたちの活動の様子や関係性を継続的に記録できる	親和性のある機能する学級集団づくりを計画できる	１２３４５
		学校・地域づくり	同僚性の高い学校づくりを構想できる	教師同士の関係性に気付く	教師同士の関係性を整理できる	同僚性の高い学校づくりを構想できる	１２３４５
			地域の未来を拓く学校を計画できる	学校が地域に役立つことに気付く	地域に役立つ学校を整理できる	地域の未来を拓く学校を計画できる	

（資料５）平成２８年度　学校インターンシップ事業計画

福島大学学校ボランティア支援室

＜ねらいとゴール＞
１　５日間の週指導運営計画を立てることができる。
２　担任の補助として計画にそって指導支援をし、学級運営について実践的に理解を深める。

⇩

○　教師の仕事を理解し、大変だが楽しいやりがいのある仕事だと実感し、
４月から始まる教師の仕事に見通しと希望を持つことができる。

〔試行のねらい〕
学校インターンシップ２年目を試行し、成果と課題を整理し、実施案策定に資する。

１　学校ンターンシップのねらい
４月から教員になる学生を対象に、学校インターンシップをとおして実践的指導力向上に資する。

２　期間

平成２９年１月２３日（月）～平成２９年１月３１日（火）	学校ボランティア活動
平成２９年２月　１日（水）	オリエンテーション
平成２９年２月１３日（月）～平成２９年２月１７日（金）	週指導計画立案
平成２９年２月２０日（月）～平成２９年２月２４日（金）	学校インターンシップ実習
平成２９年３月　１日（水）	事後反省

３　対象学生と対象学校
学校ボランティアを少し長く活動し学校インターンシップを希望する学生で、活動した学校で行う。

№.	氏　　名	対　象　校	備　　考
①	KM	G 小学校	

４　基本プログラム

	月日	曜	活動内容	担　当	備　考
事前	2/01	水	オリエンテーション	学生、大学（指導担当）	学校ボ支援室
計画	2/02～	木	週指導計画・時案の作成	学生、指導担当	学校
	2/16	木	学校ボランティア 学校、担任との打合せ	学校（校長、教頭、担任） 指導担当	16:00　学校
	2/17	金	運営、指導計画の確認	学生、指導担当	
実施	2/20	月	１日参観	学生、担任、指導担当	シミュレーション
	2/21	火	１日補助活動		ウォーミングアップ
	2/22	水			ウォーミングアップ
	2/23	木			ステップ
	2/24	金			ジャンプ 教職課程検討委員会
事後	2/28	火	成果と課題の整理	学校（校長、教頭、担任） 学生、指導担当	15:30　学校

5　実施体制

職　名	氏　名	内　容	実習学生	実習校	備　考
教　授	松下　行則	総括			
研究員	齋藤　幸男	学生指導		福島三小	
	二瓶　洋允	学生指導			

6　実施内容

№.	内　容	項　目	備　考
1	児童理解	児童名簿、座席表、個別記録の取り方	
2	授業づくり	週指導計画（週案）の作成 １時間ごとの指導計画（時案）の作成と評価	週案用紙 学習指導要領 教科書、指導書
3	学級づくり 生活指導 環境経営	学校教育目標、学年・学級目標、学級のきまり 朝の会、帰りの会、給食指導等の進め方 生活指導の実際 掲示板の活用	学校運営計画
4	学校づくり	校長、教頭、教務主任、養護教諭、事務職員、用務員、その他の学校職員の役割等の理解と協働	報連相
5	その他	トラブル予防、解決法	

7　スケジュール

（1）学生募集・選定

１２月　８日（木）～１２月１４日（水）学生募集期間
１２月２１日（水）　学生・学校決定
１２月２２日（木）～　１月３１日（火）該当教育委員会、学校への依頼説明
２月　１日（水）～　２月２８日（火）実施期間
２月２４日（金）～　３月　３日（金）アンケート調査期間
３月３１日（金）　試行のまとめ

8　アンケート調査

（1）対象
学校（校長、教頭、担任、担任以外の学校職員）
学生

（2）内容
試行案項目

9　その他

（1）日程は、実習校の予定で変更になることがある。
（2）希望する学生は、学校インターンシップを参観することができる。